

第1章

ESD の “これから” をデザインする

< ESD-J 全国ミーティング 2008 >



ESD の“これから” をデザイン

ESD-J 全国ミーティング 2008

「ESD の今を共有し、これからを議論する場」として毎年開催している ESD-J 全国ミーティング。2008 年は 3 月 8 日～9 日の 2 日間、「ESD の “これから” をデザインする」と題して、立教大学で開催しました。2 日間に時間枠を拡大し、会員による発表の場や ESD の議論を深める研究会を充実させた結果、過去最高の 200 名を超える参加者に恵まれ、ESD への関心や取組みが広がりつつあることを実感できる 2 日間となりました。



した 2 日間

日時： 3 月 8 日（土） 13:30～18:20（19:00～交流会）

3 月 9 日（日） 10:00～16:30

会場： 立教大学 7 号館

全国ミーティング・かけ足レポート

「ESD の “これから” をデザインする」と銘打った今年の全国ミーティング。参加者の顔ぶれは NPO、教育関係者、行政、企業などさまざまな約 200 名、北海道から沖縄まで全国各地から駆けつけてくださいました。会員によるパネル展示や分科会の発表の場を設けることで、政府や国際機関、ESD-J の動きを受信するだけでなく、それぞれが自らの ESD を発信でき、ネットワークを広げられる魅力が増したのではないかと思っています。実際、枠組みいっぱいの申し込みを受け、15 の分科会、24 のパネル展示が行われ、参加者は多様な ESD に触れ、つながることができました。（☞分科会 15 ページ、パネル展示 34 ページ）

全体会はユネスコ本部（パリ）の ESD 責任者、マーク・リッチモンド氏によるユネスコの取組み状況の報告に始まり、国連大学、文部科学省、環境省など、国際および国レベルでの ESD 推進施策の状況を共有しました。もっとも注目されたのは、パブリックコメント受付け中の新学習指導要領。夜の懇親会や 2 日目の全体会でも「ESD を総則に盛り込むべき」という熱い議論が続きました。

地域の取組みでは、多様な主体がそれぞれのイニシアチブによって展開している ESD をつなげ、より広げていこうとしている東海地域を紹介。エネルギーッシュな動きに驚きながらも、この動きを継続していくためには資金をはじめとした ESD を推進するしくみや支援が必要であり、それが今までの動きも長くは続かない、という問題意識を共有しました。

これらの報告を受け、ESD-J 阿部代表理事からは、「ESD-J はネットワーク組織として今後なにに取り組んでいくべきか」という方向性を発表しました。2003 年に発足して 6 年目、2008 年はこれまで収集してきた実践事例や、築いてきた実践者のネットワークを生かして、「ESD の具体的な姿」「それを推進するためのしくみ」を理論化・政策化し、提言としてまとめる年とします。その議論につなげる場として、2 日目の研究会を位置づけています。（☞全体会報告 30 ページ）

研究会（2 日目）は、「食と農」「学校と教材」「ESD を進めるしくみ」「ESD コーディネーター」「世界」の 5 つのテーマで行いました。例えば「コーディネーター」の研究会では、ESD コーディネーターに求められる役割や能力を、いくつかのタイプに分けて整理しました。他の研究会で話しあわれ、まとめられた内容も、今後 ESD をより深め広げていくうえで大切な素材や方向性を示すものとなったと思われます。議論をこの場限りのものにすることなく、2008 年度の ESD-J の取組みのなかで生かしていくことが大切だと思っています。（☞研究会報告 20 ページ）

全体会（最終）では、各研究会の成果を共有したのち、ESD 推進に何が必要かを参加者全員でディスカッションしました。2008 年は北海道で G8 洞爺湖サミット、2009 年はドイツで ESD の 10 年中間年の国際会合、2010 年は名古屋で生物多様性条約 COP10 が開催されます。持続可能な社会づくりに向けた世界的な動きを、ESD 推進のチャンスとしていこう、そんな思いを共有して全国ミーティングは閉会しました。

それでは、ESD の “これから” をデザインした 2 日間で起こったできごとたちを、誌上でたっぷりお楽しみください。

ESD の “これから” をデザインする

1日目 3月8日（土）		
12：30	参加受付開始	(ロビーにてパネル展示)
13：30	開会挨拶	阿部治 (ESD-J 代表理事)
13：40	基調講演 ESD 推進における国際動向	ユネスコ 国連教育優先課題調整部長 (ESD 責任者) マーク・リッチモンド
14：15	【全体会】ESD の今とこれからを知る <ul style="list-style-type: none"> ■世界の ESD はどう動いているのか？ 国連大学高等研究所 上席研究員 名執 芳博 ■日本政府の ESD 推進方策とは？ 文部科学省 初等中等教育局 視学官 牛尾 則文 文部科学省 國際統括官補佐 大村 浩志 環境省 総合環境政策局 環境教育推進室 白石 賢司 ■地域における ESD の取組みと課題～中部地域からの発信～ 中部 ESD 拠点協議会 古澤 礼太 (中部大学中部高等学術研究所研究員) (中部 ESD 拠点 (RCE) 事務局) 東海・中部 ESD 市民推進会議 天野 学 (東海・中部 ESD 市民推進会議 共同代表) かすかい KIZUNA 上野 薫 (かすがい KIZUNA 世話人) (中部大学応用生物学部講師) ESD-T (東海) 浅田 益章 (ESD-T メンバー) EPO 中部 桜井 温子 (EPO 中部スタッフ) コーディネーター 新海 洋子 (ESD-J 理事) ■中間年に向けた ESD-J の活動戦略 阿部治 (ESD-J 代表理事) 	
17：00	【分科会】ESD 事例発表	会員による各地・各分野での ESD 活動報告 (20 分 × 15 事例) 各会場
18：20	終了	
19：00	懇親会 (池袋西口 別会場)	

2日目 3月9日（日）		
10：00	【ESD 研究会】ESD のこれからをデザインする	
	(1) 地域の ESD を促進するしくみ コーディネーター：新海洋子、森良 会場 7201 (2) 都市と農村と ESD、食と農を切り口に コーディネーター：清水悟、山本幹彦 会場 7202 (3) 学校での ESD 実践、ESD 教材 コーディネーター：浅川和也、前川実 会場 7203 (4) ESD コーディネーター養成講座 コーディネーター：世古一穂、竹内よし子 会場 7301 (5) みんなと地球と ESD コーディネーター：大島順子 会場 7302	
15：00	【全体会】ESD のこれからを創造する	

5つの研究会の成果を踏まえ、各コーディネーターによるパネルディスカッション

5



基調講演

ESD 推進における国際動向

ユネスコ 国連教育優先課題調整部長 ESD 責任者 マーク・リッチモンド

持続可能な開発のための教育の 10 年 (DESD) が始まって 4 年目に入り、2009 年 4 月にはドイツ・ボンで中間年の国際会議を開催します。中間にむけ、国際、地域リージョン、国家レベルで、どの程度 DESD が達成されたかについて見直しをする時期になりました。

ユネスコの主導機関としての役割は、加盟国およびパートナーの取組みが円滑に進むような手助けをし、調整していくことにあります。ユネスコは、持続可能な開発の取組みにおける、教育と学習の重要性に、一貫して強調してきました。ユネスコは、国際・国家的な EFA (万人のための教育) 課題における ESD の認知度を高めるような技術対話に着手してきました。さらに、MDGs (ミレニアム開発目標) の達成における、EFA と ESD 双方の補完性を認識しながら、EFA をすすめるパートナーが、ESD に向けた支援に力を注いでいるよう、支援してきました。

これまで、ユネスコの取組みは、DESD の効果的な実施にむけたツールやガイドラインの整備、調整のためのしくみを構築することが中心でした。これからの 2 年間は、ユネスコは、DESD のアドボカシーや推進にむけた役割の強化に取り組むことになっています。この取組みには、次のようなことがあげられています。

- 國際的にそして国連内部で、DESD の支援におけるコーディネートをすすめる
- ESD への効果的なアプローチに関する交流を特定化し、発展させ、促進させていく活動にある既存のしくみ (ユネスコ・チェアーやユネスコ協同学校ネットワークを含む) を活用
- ドイツ政府が主催する、2009 年 DESD 中間年見直し会合の準備
- 国家、地域リージョン、世界レベルでの DESD 実施状況のモニタリング

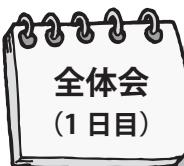
2008 年より、ユネスコは国レベルでの DESD 実施状況の見直しをはじめました。その中核となっているのは、DESD の目標達成にむけて整備された環境と体制の評価です。調査票が、ユネスコ国内委員会を通して各加盟国に送付されています。調査票への回答は、DESD 実施に対する多様なアプローチや、教訓、直面している課題、実施予定の行動を把握するうえで役立てていく予定です。

ユネスコは、DESD の成功に向け全力で取り組んでおり、将来の ESD に関するアドボカシー、促進およびプログラムをさらに向上させていくつもりです。ユネスコは、この重要な取組みにおける日本からの支援に期待しております。そして、もちろん、ユネスコも、日本での取組みに対する支援をすすめたいと思っております。



マーク・リッチモンド
(Mark Richmond)

ユネスコ 国連教育優先課題調整部長
英国およびアメリカにて中等・高等教育に携わったのち、1994 年ユネスコでの勤務を開始。難民や戦争・紛争後など緊急時における教育プログラムの設立に携わった。その後、ユネスコ事務局長室での勤務を経て、現職にいたる。現在、万人のための教育 (EFA)、国連識字の 10 年、国連持続可能な開発のための教育の 10 年 (UNDESD)、教育と HIV/ エイズなどを担当。英国ハル大学比較教育学 (MPh)



ESD の今とこれからを知る

■ 国連大学高等研究所による ESD に関する地域拠点（RCE）づくりの進捗状況

国連大学高等研究所 上席研究員 名執芳博



RCE (Regional Centres of Expertise on Education for Sustainable Development) は、持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点。ESD の取組みが一つの小学校で終わらないように、大学、高校、中学などの縦の連携、地域の小学校の先生同士の横の連携をすすめ、公的教育機関だけでなく、博物館の学芸員、植物園の人、地方公共団体の人、企業、メディアなどなど地域全体としてすすんでいくことをめざしているものです。地域の拠点として国連認定する方式で、現在アメリカ 8、アジア太平洋地域では日本の 6 を含めて 21、アフリカ 6、中東 1、ヨーロッパ 11、計 47 カ所が認定されています。

RCE の審査委員会は年 1 回開催します。認定のさいの基準（クライテリア）は、以下のとおりです。

- 1 協働・連携
- 2 ビジョン RCE が何をめざしているのか（地域の課題に対応したもの）
- 3 管理形態 設立までの地域での対話。存続、財政的基盤、意思決定。活動評価のモニタリング
- 4 すでに行われている活動、今後の計画など

国連大学としては、この RCE をさらに増やし、それらをネットワーク化していくことで、目にみえる形で地域レベルでの ESD がすすんでいくと思って取り組んでいます。

■ 日本政府の ESD 推進方策とは？

文部科学省 初等中等教育局 視学官 牛尾則文

文部科学省 國際統括官補佐 大村浩志

環境省 総合環境政策局 環境教育推進室 白石賢司

〈進行〉 池田満之 (ESD-J 副代表理事)

政府全体

日本政府は、2005 年に ESD の 10 年関係省庁連絡会議を設置し、2006 年 3 月「ESD の 10 年実施計画」を作成、これにもとづき ESD 推進を実施しています。2008 年に入っての新しい動きは「ESD の 10 年円卓会議」を設置、開催したことです。ESD は政府だけではなく、NGO、教育機関などさまざまなパートナーシップですすめていく必要があり、それを具体化するための意見交換の場として位置づけています。

2009年の中間評価会議や2010年のESDの10年実施計画の見直しにむけて、一つのスタートを切ったと考えています。

環境省

2006年より開始した持続可能な開発のための教育（ESD）促進事業では、全国14カ所でESDの実施モデル事業を展開。これらの実践からESD推進に有効な視点やノウハウ、支援などを抽出し、各地でESDをはじめるさいのヒント集としてまとめています。また2007年度から全国7ブロックで地域ESD推進フォーラムをスタートさせました。

さらに、アジア高等教育機関環境人材育成事業を2007年から開始、高等教育機関の取組みのあるべき方向性を議論してきました。2008年度は大学でのESDのプログラムづくりに着手していきます。

文部科学省

「社会において持続可能性という課題があることに気づかせる」のがESDの大きな要素であり、すでに学校現場でさまざまな取組みがされていると考えています。ただし、それをまとめる「ESD」という概念が学校現場ではあまり知られていません。

一昨年、教育基本法改正のなかで、ESDをサポートするような教育理念が盛り込まれました。また、2月15日に案を示した新学習指導要領の改訂のなかでは、中学校3年生の学習の最後に、持続可能な社会づくりのために自分たちはなにができるのかを考える時間をつくりました。（☞199ページ：教育基本法抜粋）

学校教育におけるESD推進につながるおもな施策として、4点紹介します。

- 1 環境教育推進グリーンプラン：「持続可能な開発のための教育に力点を置いた調査研究事業」という具体的なカリキュラムづくりの実践調査研究。2008年度9の地域と2つの団体で行う。
- 2 農山漁村におけるふるさと生活体験推進校：農水省と協力して、すべての県で5校指定し、体感的に自然や環境の問題に理解してもらうための体験活動を推進する事業。
- 3 学校支援地域本部事業：さまざまな課題を解決するための学習をすすめるために、地域の人びとが活動を実践している方に学校へ協力し、先生方を助けていただくための事業。コーディネーターを雇う予算なども用意している。
- 4 ユネスコスクールの推進：ユネスコスクールは世界176カ国で7900あるが、日本では24。ユネスコの理念を広げることはESDの理念を広げることと一致しており、持続可能な社会つくりのための人をつくっていくため、ユネスコスクールを広げていく。



優良なコンテンツをつくっていくことが、学校の先生の取組みのなかでは重要です。日本通運がユネスコのもっている教材を日本語訳し、さらにわかりやすくまとめてテキストをつくってくれました。企業がCSRの活動として学校のESDを支援する事例、私たちもこうした活動をバックアップしていきたいと思います。

コーディネーターから、各省へインタビュー



(左から) 進行: 池田、環境省:白石氏、文部科学省:大村氏、牛尾氏

池田 環境省・白石さんへ:円卓会議には 15 名ぐらいが参加されているとのことですが、それ以外の方々が円卓会議に声をだしたいときにはどうしたらよいのでしょうか？

白石 15 人は固定ではなく、テーマにあわせた方をお呼びすることになっています。例えば、地域づくりと教育を考えるときには、もう少し実践されている方をお呼びするなど、フレキシブルに運営していきます。

池田 文部科学省・牛尾さんへ:中学校の理科・社会だけでなく、学習指導要領の総則あたりに ESD を表記する必要があると思いますが、そういう意見はパブコメにだしたりすれば拾いあげられる可能性はあるのでしょうか？

牛尾 みなさまの意見とほかの方々の意見を踏まえて考えます。ただ総則に入れるというのは一つのアイデアだと思いますが、言葉だけ掲げることによってなにかが解決するという幻想を抱くのではなく、日々の学校の取組みでどんな内容を教えていくと、最終的に ESD につながるのか、具体的な取り組みが大事だと思います。

池田 文部科学省・大村さんへ:ユネスコが DESD の中間年へむけたアンケートを各国にだしているとのことですが、政府の外の取組みや声を反映させられるしくみはあるのでしょうか？

大村 関係省庁連絡会議や円卓会議、ESD-J などが枠組みとしてはありますが、ESD-J に限らず、いろいろな方々の声を拾いあげていくのがわれわれの仕事だろうと思います。そして日本として拾いあげるだけでなく、それをユネスコを通じ、具体的にどういうアクションを起こしたかということを発信していきたいと思っています。

池田 最後に一言ずつお願ひします。

白石 地域で行われているよい事例や必要な支援など、ESD-J で意見をとりまとめていただいて、教えていただければと思います。

牛尾 私としては、学校のなかでの取組みをすすめていきたいと思いますが、大人社会を変えないとどうにもならないと思います。ぜひ、その辺にご尽力いただけるとありがたいと思います。

大村 学校を支える高等教育機関、地域の方々が ESD という概念のもとでつながって ESD の取組みをすすめていただくことが大事だと思っています。日本の高等教育機関も横につながっていくというタイミングがもうすぐ必要です。いろいろなしきけをして、みなさんがつながっていく場をつくりだしていきたいと思いますので、ぜひご協力ください。

■ 地域における ESD の取組みと課題～中部地域からの発信～

中部 ESD 拠点 (RCE) 協議会 古澤礼太

東海・中部 ESD 市民推進会議 天野学

かすがい KIZUNA/ 中部大学 上野薫

ESD-T (東海) 浅田益章

EPO 中部 桜井温子

〈進行〉新海洋子 (ESD-J 理事)

東海・中部エリアの ESD ネットワーク

新海 中部地域にはすでに自然・環境・人権・平和といったテーマで ESD 的な学や活動をしている団体がたくさんあります。それらの団体は団体のミッションを実現する活動が精一杯で、横につながったり、連携することが難しい状況にあります。東海・中部では、ESD-J と共に実施した地域ミーティングから、そういった団体と ESD の 10 年の間になにをつくっていこうか、と話しあってきました。そして、ESD-T や東海・中部 ESD 市民推進会議などのネットワークをつくってきました。まずは東海・中部で活躍している団体を紹介します。

中部 ESD 拠点 (RCE) 協議会



古澤礼太氏

古澤 中部 RCE がターゲットにしているのは愛知県、岐阜県、三重県の 3 県です。これは行政区画や経済区分としてではなく、環境の視点でみると、伊勢三河湾とこの湾に流れ込む河川の流域をエリアととらえ、伊勢三河流域圏と呼んでいます。縦軸には 11 本の河川と流域圏があり、横軸にさまざまな活動があります。上流には過疎の問題、都市にはエネルギーや外国人労働者などの問題が横たわっています。今の社会ではさまざまな問題が非常にバラバラに存在し、活動もバラバラに行われていますが、中部の RCE では上流と下流をつなぎ、お互いの問題意識を共有し、空間・制度・心の持続可能性の視点から、流域圏における持続可能な社会をデザインし構築していくことをしています。例えば、日系ブラジル人の若者支援活動と、森林の間伐活動の連携など、さまざまな可能性を形にしていきたいと思っています。

東海・中部 ESD 市民推進会議



天野学氏

天野 昨年、この全国ミーティングで、私は中部地区の ESD のすすめ方これからを話させていただきました。そのときの話は、ESD-T と RCE 市民推進準備会（正確名称は忘れました）を発展させて、東海・中部 ESD 市民推進会議をつくりますといいました。現在、中部 ESD 市民推進会議の担う役割としては、NGO/NPO や企業に対し「中部 ESD 拠点協議会」への参加促進、また地域での ESD 活動をしている団体との協働、ネットワークづくりや実践活動です。また、中部 ESD 協議会に市民の立場の意見を伝えようと、毎月 1 回会議をもちながら提案づくりに取り組んでいます。名古屋では 2010 年に生物多様性条約に関する国際会議が開催されます。市民推進会議も積極的にかかわり、盛りあげていきたいと考えています。

(KASUGAI きずなプロジェクト)



上野薫氏

上野 私たちは、地域に既存する自然環境資源や人的資源を有機的に結びつけ、“人と自然の命を尊ぶ心を育む授業”を、小学校の総合的な学習のなかで実施できるよう、カリキュラムづくりや大学生のコーディネーター育成に取り組んでいます。2007年度は一つの小学校で4・5・6年生の3学年を対象に実施。大学生には人間力と専門性を伸ばすよい機会となり、小学生には社会性の向上や現実と机上の学習とを関連づける機会となりました。小学校の先生にとっては、苦手な野外調査等の分野のノウハウを大学から提供され、地域で連携することで苦手なことが補いあえて、とてもいいという評価を得ています。

課題は、地域への広がりと質の向上、そして組織の維持発展。やりたいとことを実現するにはまだまだメンバーが足りません。環境省のモデル事業としてスタートしましたが、その資金は今年度までなので、今後どうすすめていくかが最大の課題です。一番大事なのは、組織メンバーがいなくならないように、やりがい感、やれる感を大事していけるような事業にすることだと思っています。

ESD-T

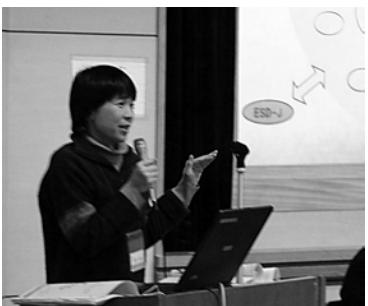


浅田益章氏

浅田 ESDってなに？からはじまり、やっと腑に落ちてきたのかなと思っています。はじめのうちは、納得できていないながらも、なにかよいことができるのだという、想いと希望だけで、ESDという言葉やその思いを広めるため、活動してきました。私たちが住むこの地域、この世界を少しでも良くしようと集まった人びとが、急がず・慌てず自分たちの歩幅で活動しています。最近は、地域でのイベントに参加して、紙芝居などわかりやすい道具を使って試行錯誤しながら伝えています。

これからも、この歩幅を大切にして、持続できる活動を行なって行きたいと思っています。

中部環境パートナーシップオフィス・EPO 中部



桜井温子氏

桜井 「ESD事業」と名前がつかなくても ESDに取り組んでいる活動はたくさんあります。EPOでは地域のESDの活動の掘り起しをしようと地域にでむいています。私たちの活動はつなぐことでより効果的なしきみをつくっていくこと。環境省の拠点なので環境教育とのつながりが多いのですが、国際協力や、障害者福祉、都市と農村などで活動する人たちともつながりをつくっていこうと連携してきました。

活動している人たちはさまざま、もっている課題もさまざま。それぞれの事情でいろいろな課題があることがみえてきたところです。しきみを実際につくるためにどんなことが必要なのか、いまもっているものをどう活かすのかがむずかしいですね。

ESD を進めるための課題解決にむけて

新海 これまでの取組みの最大の成果は、ESD のキーパーソンがみえてきたこと。ここに登壇してくれた5人は非常に貴重なキーパーソン、しかも個性豊かです。ただ、みなさんはとても疲弊しています。地域で ESD 活動を続けていくのは非常に大変。人と人との関係性を育んでいくにはエネルギーが必要です。今後中部がやるべきことは、ESD 的学びをつくろうといする人びとがしっかり保障されるしくみづくりです。そのためには資金が必要です。制度が必要です。今、がん張ろうとしている人たちがどうしたら継続的に持続的に活動を続けるしくみをつくることができるのか、ということを ESD-J や政府と一緒に考えていくことが一番大事だと考えます。

政府に伝えたいこと、みんなに話したいこと（パネル討論）

新海 最後に、壇上のみなさんから政府に、そして会場のみなさんに伝えたいことをひとことでお願いします。

「省庁連絡会議や地方事務所間の会議を頻繁に開催してほしい」

「活動を一生懸命やるのみ」

「教育機関・自治体における ESD 活動評価体制をつくっていただきたい。活動をほめていただきたい」

「ESD-J は ESD をやっている人に加え、それ以外の人への情報発信を。ESD を広めてほしい」

「若い人が拠点に入れるようにジェネレーションバランス、世代間のバランスのいい ESD 活動にしていきたい」

「しくみをつくる人材の経済基盤を保障することが大切」

「なにかを始めると必ず課題がでてくる。課題をみたとたんに、もうやりたくない、やれる人材がない、というマイナス思考になってしまいがち。それをいかに支えていくかというのが中間支援の役割。そういう形をみせていくことが地域にできること。そうすることで地域にはなにが必要なのかを政府にみせていきたい」

「NGO と政府、名古屋市、愛知県がどうやって COP10 にむけて協働していくか、議論がはじまっている。そこに ESD という視点を入れてどうつくりあげるか、それを機会に春日井も多分 COP10 のいい拠点になっていくと思う。みんなで盛りあげていきたい。ぜひ中部に注目していくください。そしてまた、応援してください」



■ 中間年にむけた ESD-J の活動戦略

阿部治（ESD-J 代表理事）

ESD-J の設立主旨

ESD-J は、政府・地方自治体・企業・教育関連機関に対して対等な立場で政策提言および協働・連携による活動を行うことにより、持続可能な社会の実現にむけた教育（ESD）を推進していくことを目的として 2003 年に発足しました。特性は、NGO・NPO・個人などによるネットワーク組織であるという点です。ESD を実現するためには、国際レベルおよび国レベル、地域レベルで、人と人をつなぎ、活動と学びをつなぎ、実践と制度をつないでいく「しくみづくり」が重要です。ESD-J は「ESD の 10 年」で、そのしくみをさまざまな関係者とともに模索し、実現することをめざしています。



立場の組織（約 100 団体）・個人（約 250 名）が参画するネットワーク組織をつくることができました。また、政府は 2005 年 12 月に関係省庁連絡会議を発足、2006 年 3 月に「わが国における ESD の 10 年実施計画」を策定しました。

第一期 <2003-2005> の ESD-J

設立年である 2003 年度から 2005 年度にかけての 3 年間は、ESD を推進するための基盤整備を行う期間と位置づけ、民間レベルでの ESD に関する情報発信の基盤と、国内外の担い手のネットワーク構築に取り組んできました。また、政府に対しては ESD 推進体制の構築（ESD 推進本部と円卓会議の設置）と実施計画の策定に関する政策提言を行ってきました。

その結果、全国各地、多様なテーマ、多様な



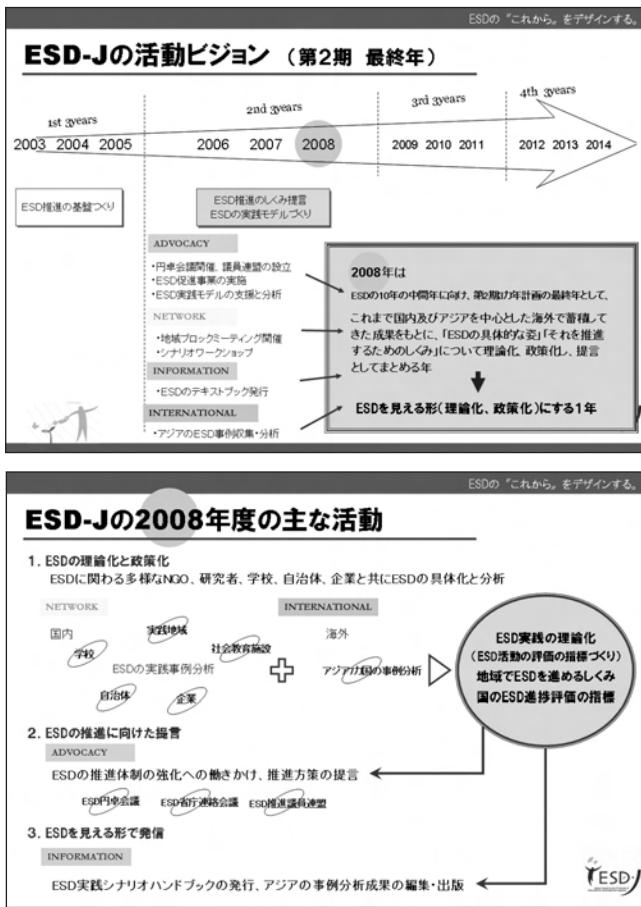
第二期 <2006-2008> の ESD-J

ESD-J は 2006 年からの 3 年間を、地域の実践者とともに具体的な ESD を形にすることと、国および地域レベルの「ESD 推進に必要なしくみ」を模索し、そのビジョンを形成するための期間として、事業に取り組んでいます。

2006 年からの成果としては、

- 環境省の ESD 促進事業や分野連携ワークショップ、プロセス抽出ワークショップをとおして、地域で ESD をすすめるさいに大切な視点やノウハウを抽出できたこと

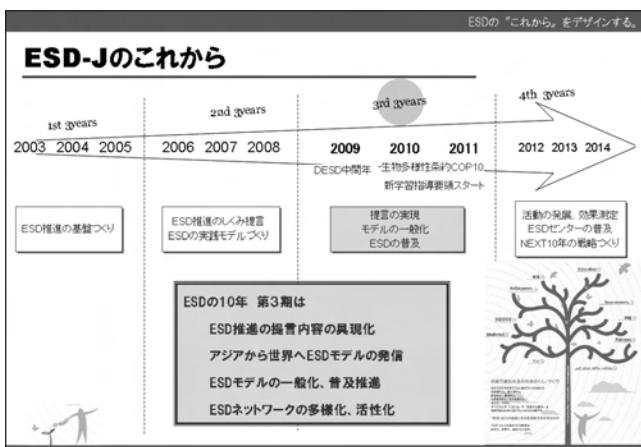
- 議員連盟や円卓会議など、国レベルの ESD を推進するしくみが形になりつつあること
 - テキストブックやパンフレットの発行など、ESD をわかりやすく伝えるツールを整えてきたこと
 - アジアの ESD 事例集とネットワークづくりがすすみつつあること
- などがあげられます。



2008 年度の ESD-J

第二期最終年の2008年度は、これまでの活動の成果やネットワークを生かしつつ、国内外において「ESD実践の理論化」「ESD推進のためのしくみ」の提案づくりに取り組む予定です。

具体的には、地域のESD実践事例を整理・分析し、「地域のESD実践ハンドブック」を発行、またそのような地域実践がより広がるために必要な推進方策を、会員のみなさまとともに議論しつつ提案をまとめたいと考えています。また、アジアの事例分析をとおして得られたアジアの視点を発信する冊子も発行します。



第三期 <2009-2010> の ESD-J

とりまとめた提言は、円卓会議や議員連盟などをとおして実現にむけたアクションを行うとともに、2009年3～4月にかけてドイツのボンで開催される「ESDの10年中間年国際会合」で、これまでの取組みとともにアピールしていきます。

2010年には生物多様性条約のCOP10開催や、新学習指導要領のスタート、ESDの10年実施計画の見直しなどが予定されています。ESD-Jはみなさまとともに、これら社会の動きをとらえながら、ESDの推進施策の具現化・ESDの普及に取り組んでいきたいと思っています。



ESD 事例発表

参画型 ESD プログラム『地球市民こどもアカデミア』のつくり方

『地球市民こどもアカデミア』 + (有) グレイスアカデミー ESD 事業部 木邑優子

2007 年 1 ~ 12 月に、幼児を中心とした子ども 25 名と大人 35 名が集まって、『地球市民こどもアカデミア』という参画型 ESD プログラムを企画・実践しました。この事例を「つくり方」とともにご紹介したいと思います。メンバー全員が企画者であり参加者、参加者数は各回約 30 名、参加費は各回実費、会場は各回お楽しみ……。1 ~ 4 月を準備期間とし、5 ~ 10 月に 9 回の本活動（日帰り 7 回、宿泊 2 回）を実施し、10 ~ 12 月に記録集をまとめて 1 年目を修了しました。本活動では、海や山に行ったり、ピザを焼いたり……、そのなかで、お互いの気持ち、つながり、五感で感じることを大切にし、みんなで成長しました。2008 年も継続し、現在準備期間を楽しんでいます。人も技もプログラムも資金も施設も備品も、あるものを最大限活用し、自分たちができる活動を行っています。ESD のプロでなくても、ポイントを押さえればプログラムを実践でき、人が集まればなにかできます。さらに研究として取組み、この事例をベースに参画型 ESD プログラムの効果をあげる要素を、「4 つの経験と学び」「システム・マネジメントの 7 つのポイント」などにまとめました。ESD 活動の一例として発表いたします。



三井物産による在日ブラジル人子弟教育支援の試み

(株) 三井物産戦略研究所／三井物産 (株)CSR 推進部 新谷大輔

日本には多くのブラジル人が主に製造業の工場で働いており、2006 年末で約 30 万人強の人びとが暮らしています。その数は在日外国人登録者数全体の約 15% にものぼります。もはや、日本の製造業にとり、彼らの存在は欠かせなくなっています。

じつはそこで問題となっているのが、彼らの子弟をとりまく環境。というのも、親とともに来日した子どもたちは日本語力不足から日本の公立学校に入ってもはじめず、不就学や非行につながることがあり、それが社会問題となっています。また在日ブラジル人学校も設立されていますが、多くは個人運営で、日本の制度上の学校ではないため資金援助もなく、教育機材や設備が不十分な状況です。そこで、三井物産はビジネスを通じて関係の深いブラジルと日本のパートナーシップを構築するためには、こうした身近な社会問題の解決にむけた取組みも重要であると考え、在日ブラジル人学校への支援、ブラジル人支援の NPO への援助、東京外国语大学と連携した在日ブラジル人児童むけ補助教材制作などの活動を 2005 年より開始しました。こうした活動は教育を受ける機会を与え、さらに日本の地域社会との関係構築に寄与するものとして、ソーシャル・インクルージョンとしての活動と考えています。



いま、ESD に求められる視座：環太平洋地域 ESD 国際会議からの問いかけ

日本ホリスティック教育協会 永田佳之

日本ホリスティック教育協会とユネスコ・アジア文化センターは、「持続可能な開発のための教育へのホリスティック・アプローチ：「つながり」の再構築にむけた国際ワークショップ及びシンポジウム」を 2007 年夏を開催しました。

現在、グローバリゼーションの波が強い影響を及ぼすなかで、人間の健全な発達にとってふさわしい開発のあり方が問われています。このことを考えるさいに重要なのは、失われた「つながり」に対する社会経済的な視点のみならず、文化的精神的な視点。前者を人間と社会との水平的な広がりであるとすると、後者は文化のルーツや精神性との垂直的な深まりとどちらえることができます。ホリスティックなアプローチとは、この両者を視野に入れつつ、ESD を深化させていこうとするものです。

上記の国際会議では、ブータン、韓国、インド、豪州、ロシア、米国（ナバホ）、ニュージーランドなどの環太平洋諸国から、文化の智恵に深く根ざしながら、それを未来へむけて現代の教育に活かそうとしている実践家や理論家が集まり、ESD のコアはなにかについて探求しました。発表では、この国際事業でみいだされた知見などを、みなさんとともに分かちあいたいと思います。



東京学芸大学

「多摩川エコモーション～持続可能な社会づくりのための環境学習活動」について

東京学芸大学 多摩川エコモーション

二ノ宮リム さち（環境学習推進専門研究員）・遠藤 友章（学生企画委員）

東京学芸大学では、平成17年から「持続可能な社会づくりのための環境学習活動～多摩川バイオリージョンにおけるエコミュージアムの展開～」をテーマに教育プロジェクトを展開しています。「多摩川エコモーション」と名づけたこのプロジェクトでは、学芸大生が地域の人たちと協力しながら、地域課題の学習活動を行なうなかで、将来の環境学習を担う人材を育成するとともに、地域で環境学習を推進する教材やネットワークを創りだすことをめざしています。これにより、環境保全や地域活性化を通じた持続的な社会づくりに貢献するのがねらいです。



今回、プロジェクトのなかで展開している学内授業や講演会などのイベント、学生による自主企画事業について紹介します。授業では、探求学習を通じた地域資源の発掘と、それをもとにした地域活性化や環境学習支援に取り組んでいます。また、講演会やスタディーツアーなどを開催し、地域の方々と学芸大生が一緒に学べる場づくりを行っています。さらに、学芸大生の自由なアイデアによる活動のなかから優れたものを支援し、持続的な社会づくりにむけた自主活動を促しています。

今後の展開にむけ、みなさまからのご意見、アイデアをお待ちしています。

愛媛大学 濑戸内の山～里～海～人をつなげる環境ESD

愛媛大学 濑戸内の環境ESD 小林芽理



本取組は、文部科学省の平成18年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択されてスタートしました（平成20年度末まで）。

人間社会から自然環境、地域から地球規模にまたがる広い実践体系を包括する環境教育を展開するのに、必要な要素を兼ね備えている瀬戸内の多様な自然環境、歴史、文化と人材を生かし、山～里～海～人が空間的にも時間的にも「つながる」活動を通じて、持続可能な社会づくりを担うことのできる環境教育指導者の育成を目標としています。

カリキュラムは、共通教育（旧・教養部）の1～2年生と社会人聴講生を対象の「環境ESD基礎」

「環境ESD指導者養成講座I・II」で、環境教育の理論や地域から地球規模の環境・経済・社会問題を学ぶことのできる講義と、フィールド調査や公開講座を実施し、修了生には「愛媛大学環境ESD指導者資格」を認定します。また「指導者養成講座」の修了生は「指導者演習I・II」としてNPOや社会教育施設でのインターンシップを行っています。社会人聴講生の受入れとあわせて、NPOとの連携によるカリキュラムの運営体制をとることで、大学と地域が相互に学びあうことのできるしくみを設けています。

学びの銀河プロジェクト——岩手大学におけるESDの取組み

岩手大学 ESD推進委員会 三木敦朗



岩手大学は、文部科学省現代GP採択事業として「持続可能な社会のための教養教育の再構築『学びの銀河』プロジェクト」を、2006年度より実施しています。学部・学年を超えて、ESDに関連する教育プログラムを展開することが特徴です。これまで、(1) ESDの多様な内容を学生が意識し、自ら学習できるようにするための「ESD関連科目のラベリング」、(2) 地域のNPOや自治体・企業と協力して設ける新しい「ESD科目の開発」、(3) 学生・市民にESDへの関心を喚起するための「ESD銀河セミナー」の開催（これまでに12回）、(4) 東アジア（韓国・中国・タイ・カンボジア）の大学との連携を試みる「国際シンポジウム」（2007年8月～9月）、(5) 現代GPに採択された全国の高等教育機関16校の議論の場「HESDフォーラム」（07年12月）を行ってきました。今後は、岩手県の幼稚園・小中高校・高専・大学・教育委員会など、地域の教育機関が公私をこえてESDに継続的に取り組んでいく「幼小中高大ESDサミット」を開催（08年7月）する予定です。これらの取組みのなかで明らかになってきた課題について報告します。

ESDでみえてくる Generation Love ～中学校の英語の授業で試みた環境・人権・平和教育の視点～

さいたま市立南浦和中学校 斎藤守央

ESDに学ぶべき多くの視点と関連が深い題材では、セヴァン・スズキ氏の「伝説のスピーチ」が導入編としてよく紹介される。現行の教科書には、中学3年生用に3社より、高校1年生用の「英語I」に6社より掲載されている。なかでも1社が、12歳の時の'Change the World'と題した「伝説のスピーチ」の文章と併せて、15年経て「ハチドリツアーアー2007」で'Be the Change'と題した活動報告を著した文章を掲載している点は、特筆できる。講演のなかでスズキ氏は、「ご自身が若い母親世代に入り、「地球環境保護には世代間を超える愛(Generation Love)が欠かせない」と熱く語る。

上記のような内容を交えて、英語の授業で題材の音読指導をすすめると、情感豊かに音読をしようとする生徒が多かった。今回は、まだはじめたばかりですが、この取組みを報告いたします。おもな点として、(1)教科書での位置づけ、(2)シラバス(年間指導計画)づくり、(3)予算(講演会・校外学習)、(4)新学習指導要領の改訂案から読みとれること、(5)道徳の時間との関連などを話題にできれば幸いに思います。



地球温暖化防止学習プログラム 五感体験・ネイチャーゲーム

(社)日本ネイチャーゲーム協会 渡辺峰生

2008年8月に北海道洞爺湖で開催されるサミットの主要議題としてとりあげられる「地球温暖化防止」は、現在、社会の最重要課題の一つとされ、全世界的な問題として多様な分野でさまざまな取組みが行われています。この社会的テーマに全国規模の環境教育団体として、どのような貢献ができるのか。その具体的な方法として、温暖化に関する知識や温暖化防止につながる先人の知恵(風鈴、打ち水など)と、従来のネイチャーゲームを組みあわせて開発したプログラムが『地球温暖化防止学習プログラム 五感体験・ネイチャーゲーム』です。



このプログラムは「知識」を「伝える」ことに主眼が置かれることが多かったこれまでの地球温暖化防止プログラムに、感性をベースとしたネイチャーゲームを加えることで、よりリアルに、より効果的に学習をすすめ、個々の行動へと導けるのではないか。知識で伝えられない層にも伝えることが可能なのではないか。そうした観点にたち開発をすすめています。地球温暖化をストップさせるためのもっとも重要な「国民一人ひとりの意識と行動の変化」に貢献できるプログラムとして、より充実した内容にしていきたいと日本協会では考えています。

“コミュニティを創るのは私たち”

米国環境教育プログラム “Places We Live” の小学校総合学習への適用

ERIC 国際理解教育センター 梅村松秀

持続可能な開発における教育の役割と地域の重要性は、その実現が私たち自らによる意思決定と参画にあることの認識が教育をとおしてなされること、かつ地域における実践にあることが基本的認識にあると思われる。初等・中等学校での具体化にあたっての地域諸団体による協力もこうした認識を前提としてなされることが望まれる。



ERICは板橋区のある小学校6年生の年間学習テーマ「福祉」のうち、10時間プログラム作成協力の機会をえた。6年間の学校生活をとおして獲得した知識・経験をもとに、生まれ育った地域とのかかわりに気づき、よりよい地域づくりに積極的に参画することとして表題のテーマを設定。

具体的学習プランを米国環境教育プログラムPLTによる“Places We Live”をもとに、(1)私のお気に入りの場所、(2)コミュニティの特徴、(3)コミュニティの変化、(4)緑の空間、(5)地域計画について調べる、(6)未来のビジョン～私たちはどんな地域を創りたいか、の6テーマを設定。教員、地域住民、地域諸団体の協力のもと実践した。学校現場における状況を踏まえて、地域諸団体による具体的プログラム提示の重要性とともに、それを支えるしくみの確立の重要性を提起する。

くにがみそん 国頭村における ESD の可能性

NPO 法人 国頭ツーリズム協会 山川安雄

8 年前の NPO 法人国頭ツーリズム協会（KUTA）による人材育成講座をきっかけに、国頭村では「ワークショップや参加体験型学習法による学びの場」が確保されるようになった。その積重ねが「民、官、学」のパートナーシップによる地域づくりにおいて、さまざまな波及効果を生んでいる。ここで培われた認識は「私たちがやっている、地域担い手育成事業や、これからめざす環境の村宣言へつながる取組みは ESD の枠でとらえると理解しやすく、地域づくりの方向軸は間違いではないという確信」だ。



国内外視察研修や JICA 留学生セミナー、小中高校大学の授業支援や地域資源調査は、KUTA が村から指定管理者として受託管理している国頭村環境教育センター「やんばる学びの森構想」として実現した。そして、村内 10 団体、役場 5 課で構成する「やんばる国頭の森を守り活かす連絡協議会」（CCY）が 2007 年 9 月に発足し、自然環境や生活環境の保全に責任をもって展開する産業のしくみづくりがすすんでいる。それは私たちが子や孫の世代に責任をもって地域資源を持続的に活用していくための地域づくりであり、また、そこには教育的価値があるとの考え方立っています。このような形で「持続可能な開発（＝環境保全型産業構造の構築）のための地域づくり」に取り組んでいるが、まだまだ参加団体、関係者、住民の理解にはかなりの差異があり、まさに「学びの場」の確保が大切である。

県域・広域での ESD のすすめ方 「ESD ですすめる - 持続可能なつながりをつくろう」

持続可能な開発のための教育の 10 年さいたま 長岡素彦

2003 年設立の当団体は、2004 年に ESD-J の埼玉地域 ESD ミーティングを開催し、その後も「ESD をすすめる」活動を続けています。2006 年からは「ESD ですすめる」として県内各地で 6 回の ESD ミーティングなどや、関東圏 ESD ブロックミーティングを開催しました。本年度は埼玉県の「NPO と市町村との協働アイデア提案会」でプランを提案し、埼玉県、県教育委員会、和光市、同市教育委員会とともに「協働と学びで拓く未来」を開催し、ESD 学校教育研究会と授業デザイン研究会などを 4 回開催しました。



この実践例をもとにさらに地域で「ESD ですすめる」ために必要な支援・しきみなどに関して考えてみたいと思います。

< 内容 >

- ◆ 多様な人とすすめる：ESD に関するパートナーシップ活動
- ◆ 学校ですすめる：「ESD 授業デザインプロジェクト」
- ◆ 県を超えて広域ですすめる：「持続可能な福祉を ESD ですすめよう！」
- ◆ ESD フォーラム開催：「ESD をすすめる」から「ESD ですすめる」へ
- ◆ ワークショップ開催：「持続可能なつながりをつくろう」「持続可能なまち」
- 食からはじまる持続可能な未来：「いただきます」プロジェクト
- 学校と市民の ESD 地域・学校教育連携フォーラム
- 体験活動・体験教育 ESD コンソーシアム

とよた ESD 分野連携ワークショップ 分野を超えて、新・プログラムをつくってみよう！

とよた ESD ワークショップ実行委員会／NPO 法人 中部リサイクル運動市民の会 小泉達也

とよた ESD 分野連携ワークショップは、ESD-J による「ESD 分野連携ワークショップ」の 2007 年度パイロット地域の一つとして、今年 1 ～ 2 月に開催されました。この開催のため、臨時に組織された実行委員会の呼びかけで参考集したメンバーは 30 名以上。福祉系団体、自然や生活などの環境系の団体、市民活動センターや交流館などの職員、環境や生涯学習にかかわる行政職員、教員、ボイイスカウト・ガールスカウト指導者など、じつに多様な顔ぶれとなりました。



このワークショップは 3 回パッケージとして構成されており、今回はとよた流に若干アレンジされ、隔週月曜日の夜に 3 時間ずつ行われました。異なる分野の活動者どうしがお互いの活動を知り、各自がもつ ESD の種を探しだし、10 年後の豊田市がどうあってほしいかというビジョンを描いたうえで、知恵や資源をもち寄って具体的な協働プログラムをつくるという内容でした。今回の事例発表では実際のワークショップのようすや成果、一参加者として「とよた ESD」にかかわった発表者が自ら体験し感じたこと、実行委員へのヒアリングから感じたこと、参加者のアンケート結果などを中心に発表します。

ESDと文化のつながり

(財)ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 筒井清香

ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、ユネスコの基本方針に沿って、アジア太平洋諸国の文化の振興と相互理解に寄与するため設立された財団法人です。文化の多様性を守るためにの取組み、識字およびノンフォーマル教育の分野における事業を実施してきました。

ACCUは、アジア太平洋地域のコミュニティーレベルでの、とくに社会経済的に恵まれない人たちを重点とする活動を支援しつつ、そこに育ち根づいているさまざまな知恵や実践と、国際社会において持続可能な未来についての議論をつなぐ役割をはたすことを通じて、ESD推進に貢献します。そのために、情報の共有を基本にしながら、ESDをともに考える教材制作、人材養成、ネットワークの広がりとさまざまなレベルでのアドボカシー活動に取組みます。

そこで今回は、経済、社会、環境というESDの3つの領域の基底をなす「文化」に焦点を当て、アジア太平洋地域の文脈から、伝承文化が持続可能な社会にもたらす恩恵について、現場からの声を交えつつ、みなさんとともに考える機会をもてればと存じます。



筒井清香

実践からみるESDの課題と今後の展開にむけた考察

成蹊大学 廣野良吉



岡山におけるESDの取組み

岡山ESDプロジェクト(岡山市・岡山ESD推進協議会)

岡山大学ユネスコチェア

岡山ユネスコ協会・岡山市京山地区ESD推進協議会

岡山市は、官学民によるESD推進協議会をいち早く立ちあげ、公民館や学校を拠点に市全域でESDの推進に取り組んでいます。岡山市域における多彩で多様なESDの取組みとそれを支えるしくみを紹介します。



岡山大学「持続可能な開発のための研究と教育」におけるユネスコチェアは、岡山の地域や海外の大学、国際機関と連携して、持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成にむけた取組みを行っています。地域レベルではとくに社会教育・生涯学習活動を通じた持続可能な社会づくりに取り組む岡山の公民館と協力しています。昨年10月にアジア太平洋地域のコミュニティ学習センターや公民館の担当者と議論したKominkan Summitの開催や、岡山県内市内の公民館や学校と連携してのESDの実施といった岡山大学と地域の取組みを紹介します。岡山市京山地区は、京山公民館を拠点に、学校教育を担う小・中・高・大学、社会教育を担う公民館、岡山ユネスコ協会などのNGO、さらに、町内会などの地域コミュニティ、あるいは市民団体や企業が連携し、京山地区ESD推進協議会を立ちあげました。子どもから大人までが一体となった地域全体でのESDの取組みを紹介します。



ESD の “これから” をデザインする

【研究会 1】地域の ESD を促進するしくみ

コーディネーター：新海洋子、森良 参加者：18名

●研究会概要

この研究会では、地域の ESD を促進するしくみ、つまり既存の学習の総合化・国際化を可能とするしくみやそれをつくるプロセスについて、ワークショップを通じて検討しました。

小中高大の学校と地域が連携して ESD を広げている気仙沼地域の取組みと、NPO と公民館が協働して地域に根ざした学びを展開している東京・板橋地域の取組みからそのエッセンスを抽出し、地域で ESD を促進するしくみについて 4 つの課題よりグループに分かれて課題解決の方策について検討しました。



●ゲスト、発表者、発表内容

1 気仙沼市教育委員会学校教育課 課長補佐兼指導係長 指導主事 及川幸彦

(気仙沼の活動の背景)

気仙沼市教育委員会では、地域の豊かな自然を活かした環境教育を基軸に、日米教育委員会日本フルブライトメモリアル基金・マスターティーチャープログラムおよび国連大学が認定する ESD 推進地域拠点（RCE）といった枠組みを活用して ESD のプログラムの開発と実践を学校教育のなかで行い、地域における ESD 推進を図っている。

(ゲストの発表内容)

- ESD 学習を考案したパイオニアの教員がいつまでもいるとはかぎらないので、気仙沼では、学年で共有し、その財産を引き継ぐ形式とした。
- 協力者として呼びかける対象者は、徹底的に実質主

義とし、直接学校に貢献できる人だけを選んだ。

- 小中高へのバトンタッチを、少しづつ重ねる工夫をして、子どものようすをみながら発展させていく。
- プログラムを作成するとき、それを引き渡すとき、実施するときに学びがある。
- 細分化されてしまっているスペシャリストを横断的につなぐジェネラリスト的な役割を担っている。
- 評価・成果はすぐにみえてくるものではない。例えばそれは、観察する能力であったり、いのちの不可逆性「痛み」を知るといったようなことである。
- 2000 年から PISA を研究して問題解決型のテストを実施した。結果は明快にはでてこなかった。
- 生きる技としての能力は、もっと長い時間が必要だなという感想をもっている。

2 東京都板橋区教育委員会生涯学習課 大原社会教育会館 社会教育主事 齋藤真哉

(板橋区の活動の背景)

1983 年「国際障害者年」から地域活動がはじまり、社会教育主事との出会いによって、学習をデザインする手法を身につけ、地域住民自らが、地域の課題から学習テーマを創りだすようになりました。ESD との出会いにより活動は、総合的な学習の時間研究プロジェクト、高校の現代社会教材作成セミナー、ESD 文化祭と拡大している。

(ゲストの発表内容)

- 板橋区の特徴は、活動している人たちが ESD をやっているという認識がないところにある。
- 2001 年の国際ボランティア年にガンジー平和学を学ぶ「ガンジープロジェクト」を立ちあげた。
- 板橋区では、ESD の D を「未来」と読み替えている。 \Rightarrow 「開発」はよくわからない。
- 学習推進センターの学びは、「ともに生きる」ということと認識している。
- 大原社会教育会館では、年間 350 の講座を実施している。住民自らが企画し、住民自身が自主的にすすめている。

- 教育会館の立場としては、「運動（戦う）」と「学習活動（話しあい）」のちがいを強く認識している。
- キーワードは、「集う」「学ぶ」「つなぐ」そして「ともに生きる」。ESDではわかつてもらえない。
- ボランティア文化は、板橋の特徴もある。へたに制度ができることで板橋区の場合には、支障になることもある。(例:ある障害者の話。地元の人たちの協力で自立していたのに、介護制度によって阻まれてしまった)。
- 板橋区での継続の秘訣は、「おせっかい」=「人をみてみぬふりをすることができない」。

● 地域の ESD を促進するしくみをつくるうえで参加者一人ひとりが抱える課題

- 主体性を持たせるには……
- 中核メンバー（専従スタッフ）の確保
- 学びのデザイナー・ファシリテーターの必要性
- ESD の分かりやすい伝え方・体系的な学習手法
- 『知る⇒認知する⇒行動する』の流れをつくる方法
- 専門教育との整合性
- 連携機能の強化
- 社会的・経済的に継続的なしくみなど

● グループワーク

それぞれの課題意識を人間 KJ 法で分類し、次の 4 つのグループに分かれて、各課題の打開策について話し合いました。

① 「明るく」「楽しく」つなげる・続けるために主体がメリットを感じるしくみについて

- 方策
- 成功例をみせる
 - リーダーの創出
 - 目にみえて評価
 - CSR 企業とのパートナーシップ
 - プラットフォームの機能
 - 共感 理念 財政基盤

② 小中高大の ESD 促進

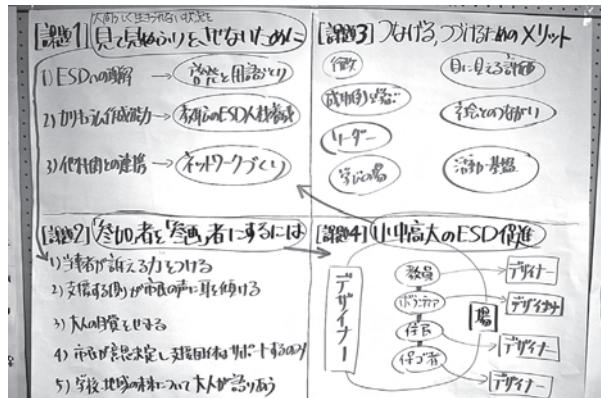
- 方策
- ESD をわかりやすく公募する
 - ESD の具体例を示す
 - 教職員・自治体職員研修に ESD をとり入れる
 - 大学のカリキュラムに ESD をとり入れる
 - ネットワークづくり(人材登録、団体登録、コーディネーター育成)

③ みてみぬふりをする市民を、いかにその気にさせるか

- 方策
- 当事者が声をだす
 - 支援団体が声を届ける

研究会の流れ

- | | |
|---------------|---------|
| 10:00 ~ 11:00 | 気仙沼事例 |
| 11:00 ~ 12:00 | 板橋事例 |
| 12:00 ~ 12:30 | 自己紹介・課題 |
| 13:15 ~ 14:30 | グループワーク |
| 14:30 ~ 14:45 | グループ発表 |



- 行政に頼らない⇒独立性
- 大人の自覚 → 未来社会を語る

↓
われわれは逃げない！という信念で
社会を変えていく

④ 人の意識をどう変えるか？～参加から参画へ～

- 方策
- ・デザイナーの存在
 - ・結びつける場を設ける
 - ・スキルの講座を開く

● 研究会のまとめ

気仙沼と板橋の事例発表は、きわめて対照的（学校教育と社会教育、フォーマルなやり方とインフォーマルなやり方など）であり、相互補完的でした。この両方の領域や方法を統合したところに地域での ESD の促進のしくみの理想像がみえてきます。大事なことは、モデルのまねをすることではなく、モデルを形づくっているリーダーシップのスタンスや意気込み（熱意）、視点やノウハウに学ぶこと。及川さんと齋藤さんの豊かなキャラクターにも学ぶ点がありました。参加者からだされた地域での ESD を促進するしくみをつくるための課題は、大別して次の 4 つに分けられます。①人材の確保の問題、②その人材のリーダーシップの中身の問題（学びのデザイナー、ファシリテーター、コーディネーター）、③学びのプロセスや方法にかかる問題、④継続的にすすめるために必要なこと。今後、このそれぞれの中身をつめて明らかにしていく必要があります。

（記録：後藤奈穂美）

【研究会 2】都市と農村と ESD、食と農を切り口に

コーディネーター：清水悟、山本幹彦 参加者：22名

●研究会概要

都市と農村交流、食と農というテーマは、地域性、課題の多様性、暮らしとの深いかかわりなどにおいて、ESD をすすめるうえで、非常に興味深いテーマの一つであるといえます。この研究会では、実践者の活動を題材としながら、人の意識変革やライフスタイルの転換、地域の持続可能性につながる、ESD 的な都市と農村交流、食農教育について、参加者のみなさんと一緒に考えてきました。

●食と農を切り口にした情報提供

総論

『都市と農村と ESD—食と農を入り口に』
(社) 農山漁村文化協会 清水悟

日本の農業は、日本人の食生活の変化、農産物の輸入依存などの環境の中で所得が減少している。つまり経済のグローバリズムによって農業存続の厳しさを増し、とりわけ中山間地ではむらの存続が危ぶまれる地域もでできている。同様の動きは、アジアの各国においてもみられ、農業は経済のグローバリズムに翻弄されている。一方で、日本において、都市生活者が農業・農村に魅力を見出し、都市農村交流を通じた地域コミュニティの再興の動きも顕在化している。

このような経済のグローバリズムに対し、技術や経済を地域化し、求められる社会経済的な政策的措置も講じつつ、自然と調和した地域コミュニティづくりをすすめることこそ、都市と農村の融合による ESD のめざす取組みだと考えられる。

事例紹介 1

『継続的な食農教育の実践と子どもたちの変容』
NPO 法人当別エコロジカル・コミュニティ 山本幹彦

北海道の当別町は野山や川、海、農村、そして都市(札幌)が近くにある場所。当別エコロジカルコミュニティは、この地で、環境教育やまちづくりをとおして持続可能な社会づくりをめざした活動をしている。具体的には、地域にある体験型環境教育施設での環境教育や、有機農業を地域の子どもたちと一緒に取り組むプロジェクトなどを行っている。今年は環境省の ESD 促進事業に採択され、「食」や「農」をキーワードとし

た体験を行いながら、子どもたちの主体性を引きだし、地域社会への参加を学ぶチルドレンファームに取り組んだ。農業の単発の体験学習は多いが(点の活動)、このチルドレンファームは麦の種まきをはじめ、パンをつくるのに必要な酵母、砂糖、塩、バターなど必要な材料を、すべて自然の素材から自分たちの手でつくり、そして地域のイベントで販売(提供)するという流れを、1年間かけて体験するものである(線、面の活動)。また、食や農をキーワードとした体験中心の総合的な学習の時間をつくっていくための ESD 教員研修も実施した。地域のフィールドや人的資源を先生に紹介し、また ESD を目的とした授業づくりのノウハウを身につけるワークショップなどを実施した。さらに、都市の住民が使われなくなった農地を借り受け、技術と農機具をレンタルし、農作物を栽培することで、農地を有効活用し、持続可能なライフスタイルを見直す「ライフスタイルファーマー塾」など、食と農を切り口とした多様な活動を行っている。

事例紹介 2

『子どもと大人が学ぶ暮らしと地域に根ざした食農実践』
NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 野田恵

長野県の泰阜村で「暮らしの学校 だいだらぼっち」という、小中学生対象に、山村留学の形式の自然体験、生活体験の教育を実践している。子供たちは1年間、地元の学校に通いながら、一つ屋根の下で田舎暮らしをする。大切にしている理念が2つある。一つは「子どもが主役」ということ。子どもたちは、基本的に自分の意志で泰阜での1年間の暮らしを決意して参加する。毎日の活動も、子どもが自分たちで話しあい、決める。そのことで、自分で考える力、自分で決める力を身につけている。もう一つは、「地域に根ざし暮らしから学ぶ」ということ。暮らしには、生きるためにいろいろな要素、学びの要素が詰め込まれていると考えている。遊びではなく、暮らしからこそ、真剣であり、悩むこともあり、喜びも本物だと思う。そして、泰阜の地域に、学校もスタッフも根ざすことでの地域の教育力が発揮されると考えている。

●グループワーク

4つのグループに分かれて、「『人づくり、につながる都市農村交流や食育とは』」というテーマで、紹介したい取組みや事例、そして大切な視点をだしあいました。

みんなに紹介したい、こんな取組み

- ・山形県長井市レインボープラン作→食→肥→作
- ・富山の「あそあそ自然学校」
- ・グリーンウッド
- ・かみえちご山里ファン俱楽部
- ・ゼミの農園で芋の栽培
- ・地域で支える学校給食
- ・「アボン小さな家」を見る
- ・ブタ・ニワトリを育てて食べる
- ・コミュニティ農園 地域の人と一緒に野菜つくり
- ・千葉の大田トラスト
- ・都会と地方の参勤交代
- ・江東区田んぼボランティア
- ・公民館の文化継承にかかる活動
- ・自分でつくったものを収穫して食べる

食と農の学びをすすめるうえで大切な視点

<目指すところ>

- ・感謝する
- ・幸せを感じる
- ・食の自立
- ・地域の自立
- ・食べて支える地域の農
- ・コミュニティの再生
- ・縁側の再生
- ・人と人のつながり

<制度の整備 / 改革>

- ・農地から宅地化禁止
- ・すべての学校で畑か田んぼをつくる
- ・減反をやめ、農地を分配
- ・全ての家庭で生ごみを堆肥化
- ・流通・加工を地域協同で



研究会の流れ

10:00～12:00	食と農を切り口にした情報提供
13:00～14:40	参加型討論 「都市農村交流・食育をどうすすめるか」
14:40～15:00	今後について



<取り組むうえで大切な視点>

- ・全体をみるということ
- ・風土と文化
- ・地域に伝承されている文化、食、農法を大切に
- ・地元農家との交流
- ・産業として成り立つ
- ・自分で判断する
- ・昔のくらし + 新しい技術
- ・地域のさまざまな人にかかわってもらう
- ・世代間の交流
- ・子どもへのまなざし
- ・命に触れる
- ・知る→わかる→気にする
- ・おすそ分け、支えあい
- ・オルタナティブなメディアの活用
- ・遊びのなかで受け継ぐ
- ・廃校の活用
- ・住み続ける
- ・社会に、地域に貢献できるというやりがい、楽しみ

●今後について

今回の研究会でだされた視点をもとに、さまざまな「食と農」にかかる取組みについて参加者や ESD-J の会員と共有していきたいと思います。共有された事例をていねいに読み解き、ESD 的な「食と農」にかかる活動をまとめることができればと思います。将来的にそれらの取組みを ESD-J の発行物としてまとめることも視野に入れて取り組んでいきたいと思います。

(記録：佐々木雅一)

【研究会3】学校でのESD実践、ESD教材

コーディネーター：浅川和也、前川実 参加者：38名

●研究会概要

学校現場でのESDに取り組むための理論や情報提供からはじまり、実践者の実践事例、また、教材開発事例、教材として映像を製作した製作者の立場からの情報提供とその映像を利用した取組みの実践例を、区分の間にふりかえりを入れながら紹介していただきました。その後、自分たちにおきかえ、「自分のいる現場でESDをすすめる、深めるために大切なこと」について、ブレンストーミングを行い、グルーピング、ラベリング、マッピング、の順番でグループごとに模造紙にまとめ、全体で共有ました。

●ESDの学校での展開

「学校・学びを変える、地域・社会をつなぐ」
目白大学 多田孝志

国際理解教育のとりまとめをしてきた立場からのESDに対する見解を紹介。「ESDがいったい従前の教育とどうちがいなぜやる必要があるのか?」を問い合わせ直す必要があると提言。21世紀の教育を切り開いていくには学校教育に視点をあて、それらをどう考えていくかが重要とし、すすめていくための4つのポイントを紹介した。①基本理念：学習指導要領に取り込むことが大切、②学習方法：ESDを具現化するカリキュラム、③技（スキル）の教育の重要性：正確に聞く、要約して聞く、さまざまな「聞く」がある、④教師のあり方：その教師のあり方として4形態を紹介。(1)企画者、(2)協調性のある者、(3)自ら学ぶ者、(4)ファシリテーターなど。たんに励ますだけじゃない。子どもの学びを促進し、子どもたちを励ますことが必要。

「体験型教育手法について」

富山工業高等専門学校 伊藤通子（ESD-J理事）

体験学習法についてさまざまな手法のちがいを紹介。ESDは自分自身が変わり、まわりが変わり、世の中が変わり、自分が知らない世界時間を考え、なにをするかを選ぶようになるための教育。最初にどういう力をつけるかを考えてからすすめないと本当の力はつかない。ディープラーンニング、ディープシンキング。「まったくちがう状況で前に学んだことが活かせる」た

めの学びが重要。体験型学習では、学習の形態ごとに、それぞれ教師、学生の役割のちがいがある。とくに問題にもとづいた学習（Problem-Based Learning）では教員の役割、学生の役割、問題のあり方、情報の与えられ方が今までのあり方とちょっとちがう。子どもたちはなにを学ぶことが必要かをわかるようになれば、学びが能動的になる。

●ESDおよび教材づくりの事例

「高校理科を中心としたESDの授業
—近木川フィールドワークと自主編成教材」
大阪府立貝塚高校・ESDかいづか代表 東照晃
地域と協力した授業のようすを紹介。ビオトープのヤゴ調査、里山の生きもの調査、昔の暮らしの知恵と環境、近木川の水質調査、魚庭の森づくり・魚庭の海づくり活動、水俣学、貝塚まちづくりなど。

Act locally think globally。地域にでかけてみたら、地域の人といろいろな教材をつくることができた。教師は地域と学校をつなぐコーディネーター。自然・人と共感できる力を育むことができたらいろいろな感性を育むことができる。

「ESD&多文化教育教材の共同開発
—『チョコレートから世界が見える』を中心に」
大阪府立今宮高校・大阪府立学校人権教育研究会多文化委員会 櫻本哲也

この教材は、チョコレートクイズなど、気軽に興味をもてるところからはじまり、「世界がもし100人の村だったら4」（DVD）をみて、その後ロールプレイやダイヤモンドランディングを行い、問題を学んでいく。

これらのプログラムをどこで実施するのか、教科・学習関連では、どこで活用するか、が課題。

学校の先生にESDの認識はないが、人権、環境などの取組みはすでにある。学校現場は新しい取組みに関しては警戒心が高く、積極的に取り組む人が増えない。正面きってESDをやろうといってもむずかしいが、従来からの環境学習、人権学習を有機的につなげることでESD概念をもとに再構築できる。

● ESD 学校研究会からの事例

「セカイのしくみを考える "地球データマップ"」
NHK 制作局第1制作センター学校教育番組ディレクター
窪田栄一

学校教育番組「地球データマップ」について制作意図から制作の工夫など紹介。勉強っぽくしないで、番組として楽しんでくれるように意識して制作した。

地球データマップ「世界の貧しさのためにできること」を部分的に視聴。

この番組だと、たとえば授業で、貿易ゲームのふりかえりで使用。あえて、理科社会と教科を分けないで表現している。

なぜ地図を使うか？ 事象だけだと、全体像がとらえづらい。地図だと一人当たりの国民総所得と戦争が起っている地図を重ねると、世界のゆがみがわかり、その根源にある理由、メカニズム、それを引き起こしている世界のしくみなどへの理解が広がり、自分につながる。

次期再放送は夜中12時から、ダウンロードは3月末からできるように用意している。

「映像資料を活かした教材・授業展開の工夫」

北海道教育大学附属旭川中学校 松田剛史

映像資料を用いて持続可能な社会のあり方を考える授業展開を紹介。中学校3年の公民的分野。①関心を高める→②理解を深める→③考察する→④学習を整理する、という流れで展開。貧困など身近に感じられない問題が、映像資料（「地球データマップ」など）を活用することで、理解も含めて身近に感じられるようになったようだ。

課題は、一斉活動のなかで、ついていけない子もいたこと。わかる、わからない、この格差をどう埋めるか？ コミュニケーションで声かけしているが、理解の深まりにちがいがみられた。



研究会の流れ

10:00～11:00	ESD の学校での展開
11:00～12:00	ESD および教材づくりの事例
13:00～14:00	ESD 学校研究会からの事例
14:00～15:05	グループワーク



● グループワーク 成果

「自分の現場で ESD をすすめる、深めるために大切なこと」

個人でポストイットを使用し、ブレーンストーミング。その後グループで模造紙にまとめを作成しました。7グループそれぞれ独自にマッピングしました。

グループワークからのキーワード（抜粋）

価値観の共有、理念、ビジョン、わかりやすさ。人、ネットワーク、連携。多様性、コミュニケーション、組織強化、伝播。人に伝える、理解、マスコミへ発進、新たな教材、コンテンツ、カリキュラム、予算、政治、政策、リーダーが変わる、情報収集、実際を見る、地元を知る、実践、具体的行動、まずやってみる、評価、学び方、教員がハッピーに。

● 今後へ

事例を多く聞けたのは、情報を欲している人にとって有意義でした。また、ESD をすすめていくためのポイントなどの抽出ができました。しかし、時間的に少なく、教材開発や、学校への働きかけなど、深く、内容の濃い話合いや議論まですすめなかつたのは残念。今後、学校に関する研究会では、日常的に情報交換を活発にさせながら、集うときには深い議論ができる集まりを企画していくとよいと思います。
(記録: 川手光春)

<話題提供者配布資料>

- ・ 高等学校での ESD の実践：大阪府立貝塚高等学校 東照晃
- ・ 学校での ESD 実践、ESD 教材：大阪府立今宮高等学校 桜本哲也
- ・ 地域から見える「世界と地球のしくみ」～「地球データマップ」： NHK 制作局第1制作センター学校教育番組ディレクター 窪田栄一
- ・ 実践報告「映像資料を活かした教材・授業展開の工夫」：北海道教育大学附属旭川中学校 松田剛史

【研究会 4】みんなで話そう～"わたしと世界と ESD"

コーディネーター：大島順子 参加者：17名

●研究会概要

「ESD を国際的に展開したいけど、なかなか踏み切れない……」、「すでに国際的な活動をすすめているけれど、もっと活動をうまくすすめていくにはどうしたらいいか……」。この研究会では、ESD の国際活動に関し、共通の関心をもつ参加者同士が知り合い、「なにが ESD なのか」をそれぞれの立場で明確にすることで、「ESDへの取組み力アップ」をめざすこと目的に開催しました。

● ESD 活動の事例紹介

人権 NPO 法人ダッシュ

廣瀬聰夫

同和問題の活動を続けてきた大阪の NPO 法人。1997 年に実施したバングラディッシュでの活動をきっかけに、国際活動をはじめた。話し言葉はできるが、読み書きのできない在日韓国・朝鮮人一世の人びとや、在日ブラジル人・ポルトガル人への識字学級を日本で実施してきた。日本での活動と、バングラディッシュの NGO が実施している識字教室を結びつける交流をはじめた。同じ識字学級をやっている者同士、マイノリティ同士の交流をしている。ダッシュには国際活動のノウハウはなかったが、国際的活動の経験が豊富な日本の NGO を介して、現地とのやり取りをすすめてきた。活動によって、非識字者が、人前で自分が非識字者であることを名乗り、課題を共有できるほどエンパワーされていった。

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW)

太田まさ子

北九州には、女性を中心とした公害克服の歴史「青空がほしい運動」があり、もともと地域・環境に関連した女性団体が多くあった。KFAW は、こうした女性団体からのサポートを受けて活動をはじめた。①ジェンダーの主流化、②環境・開発の視点を大切にしながら、アジアと女性のフォーカルポイントとしての役割を果たしてきた。KFAW は、RCE を北九州で推進する、北九州 ESD 推進協議会(2006 年 9 月発足)の事務局も担っている。また、環境省の ESD 促進事業モデル地域もすすめ、ジェンダーの視点を大事にしながら、さまざまな活動を展開している。

女性と環境の関係は、重要といわれながらもみえにくい、意思決定機関における女性の参画が少ない、といった課題がある。課題解決にむけ、楽しい体験型の学びを取り入れ、公正で持続可能な社会、男女ともに暮らしやすい世界づくりに取り組んでいきたい。

(社) ガールスカウト日本連盟

桑原直子

少女と若い女性が、自分自身と他の人びとの幸福のために、異年齢のグループで活動をしている。共通の「約束とおきて」のもと、自己開発、人とのかかわり、自然との交わりの 3 つのポイントを入れた活動をしている。活動は、奉仕活動、国際活動、UK ガイド交流事業(活動を通して、共通の課題を異なる立場文化の人びとが扱う)、日韓での活動、ピースバックプロジェクト(ミャンマー、アフガン難民の支援)、国連高等弁務官事務所(UNHCR)との協力など多様な活動である。国内の活動に国際的な視点が入っているのが特徴的。

90 年代初頭に ESD の考え方方が入ってきたときに、これまでの活動との重なりを感じた。なんでもありになりがちな活動をしていくなかで、自分のなかでとどめるのではなく、「自ら発信すること、声をあげること」で社会に影響を与えて活動をしている。

(財) 日本自然保護協会

芝小路晴子

日本の生物多様性を守り尊重する社会を創ることを目的とした財団法人。①調査・研究、②環境管理・政策提言、③教育普及・広報の 3 つの活動を互いに結びつけ他活動を展開している。観察・保護を基点に、人以外の生き物と、人の暮らし、自然と人の折り合いをつけるということを活動の視点にとり入れながら、自然観察指導員の育成、地域環境管理、里山などの保全研究活動などをすすめてきた。

国際的な活動としては、国際生物多様性情報の収集・発信、世界の自然保護に関する考え・しくみづくりへの参加に取り組んでいるほか、IUCN 日本事務局を担ってきた。国際的な自然保護の動きと考え方を日本に導入する窓口の役目を果たしてきた。その活動をどう充実させるか、海外研究者の活動支援プロジェクトをど

う拡充させるか、2010年の生物多様性条約締結国際会議を機に、活動をいかに企画・展開するか、という課題に直面している。

● ESD活動の視点・枠組みの共有

(財)ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)と、ESD-Jが、それぞれの活動のなかで大切にしているESDの視点を共有しました。

イノベーション創成プログラムにみられるESDの視点
ACCU 柴尾智子

- 【横断的テーマ】ESDの学際的な特徴に鑑み、プロジェクト内容には横断的テーマがみられるか。
- 【社会的弱者への配慮】不遇の立場におかれた者（非識字者、新識字者、女性・女子、非就学児童、障害者など）に配慮した計画が立てられているか。
- 【説明責任・モニタリング・評価】透明性のある予算計画および効果的なモニタリング・評価のしくみがプロジェクト案に含まれているか。
- 【実施手法】プロジェクト目標を実現させるために、適切な実施手法が用いられているか。
- 【ボトムアップ型学習・参加型手法】プロジェクト立案または実施の初期段階より利害関係者との対話のプロセスを重視していると思われるか。
- 【革新-ESDの特徴】各プロジェクトに期待される特徴・特質^(*)に立脚し、本プロジェクト案は革新的“innovative”であるといえるか。
- 【生活様式・行動への効果】本プロジェクトの実施により、ESDに則った意識の啓発を通じて、人びとの生活様式または行動に効果がおよぶしくみが担保されているか。

AGEPP（アジア実践交流事業）視点
ESD-J 阿部治 野口扶弥子

- 事例は、アジアの農村文化や社会に根ざしているか？
- グローバリゼーションや、乱開発に対し、オルタナティブな視点で活動がすすめられているか？
- 先住民の知恵などをとり入れているか？
- 活動が、地縁や血縁にもとづいているか？
- 参加者や活動をすすめる人びとは満足をしているか？
- 政策や、制度、集団、文化、コミュニティのなかでなんらかの影響を与えているか？
- 活動は、しっかりと管理され、自立・発展性のあるものか？
- 環境、社会、文化、経済など、持続可能な課題とどう関連しているか？
- 活動に関わる人びとの主体者意識を育んでいるのか？
- 活動の意思決定が、どのようなプロセスでなされているか？

研究会の流れ

10:00	挨拶・自己紹介
10:30	会員団体の国際的な活動紹介
13:00	ESDをすすめる視点・枠組みの共有
13:40	グループワーク
14:20	発表ととりまとめ（15:00修了）

- どんな教育手法がとられているのか？人びとの考え方、価値観、行動様式を変えるような教授法（例：システム思考、参加型手法、対話、ホリスティック・アプローチなど）がとられているのか？
- 活動のモニタリングと評価はされているか？
- 国際的な教育活動と関連性があるか？

● グループワーク

4グループに分かれ、事例共有、ESDの視点紹介の両セッションを聞いて、各自が感じた「ESDの視点」や、疑問について共有し、議論をした結果、以下のキーワードがでてきました。

グループワークからのキーワード

国際実施計画と現場の活動を結ぶ双方向の動き／変革に伴う困難の共有を含めた連携／日常にあるESD要素の意識化／あらゆる分野の取組みにあるESD要素の意識化／体験からの学び／しくみづくりとエンパワメントの両立／年代間のかかわり／意識の持続可能性

●とりまとめ

代表理事の阿部が研究会をとりまとめ、次のようにコメントをしました。「ESDのベースは、身近な家族・地域・職場。そこでどう具体化し、世界とどうつながっていくか。グローバルな視点・知識をつけ、協力と交流という発想をつなげていくか。ドイツで「国連ESDの10年」中間念レビュー会合が開催される。日本の動きを言葉にして知らせたい。ヨーロッパ的な会合ではなく、ホリスティックな会合になるよう働きかけていたい」。（記録：野口扶弥子）



【研究会5】ESDコーディネーター養成講座

コーディネーター：世古一穂、竹内よし子 参加者：20名

●研究会概要

ESDコーディネーターは、ESDの理念を広め、多様な市民活動団体との協働、行政機関、学校や教育機関、企業などとの協働をコーディネートしながら、ESDを地域ですめる人材だと考えます。この研究会では、「協働コーディネーター」の概念や養成の方法をベースに、ESDコーディネーターの役割とはなにか、また、ESDコーディネーターに必要な能力とはどういうものかを明らかにするとともに、それを身につけ、役立てるための方策を探ることをめざしましたが、役割と能力を抽出するまで時間切れとなりました。参加者は、行政（1）、企業（3）、NPO（16）の20名。

●ベースの共有「協働コーディネーターとは？」（世古）

コーディネーターは、そのコーディネートする対象によって、5つのレベルに分けられる。協働コーディネーターとは、④⑤のレベルを指し、高い専門性が求められる。

- ① 地域で仲間をつくって新しい動きを生みだしていく
- ② 組織内のネットワーキング（組織の縦割りをつなげていく：とくに行政など）
- ③ 同セクター同士をつないでいく（NPO同士、行政同士など）
- ④ NPO・行政・企業など、異なるセクターをつないでいく
- ⑤ 国際的なネットワークをつないでいく

協働コーディネーターの役割は大別して、1) ファシリテーター、2) コーディネーター、3) アセッサー（評価者）の3つがある。ファシリテーターは、会議の進行役であるが、司会者とは異なり「参加のデザイン」の能力をもって、中立の立場で、参加者の意見を引きだしながら、問題点を抽出、整理、分析し、議論を活性化させる役割を果たす。コーディネーターはたんに多様な主体間を調整するのではなく、中立性をもって協働をあるべき姿にもっていくスタンスと力が求められる。

協働のステージには、1：お金で動く、2：非営利で動く、3：哲学的な世界が考えられるが、多くの協働がステージ1で動いているように見える。めざす方向として、「市民社会の役割をコーディネートしていく=公共哲学」という視点が重要で、公私二元論ではなく、

公私公共三元論へ、「滅私奉公→滅公奉私（ミーイズム）→活私開公」へと導くことが重要であろう。

●えひめグローバルネットワークにおけるコーディネーターの役割（竹内、世古）

<活動の概要：竹内より>

モザンビークの武装解除をすすめるNGOとの出会いをきっかけに、まちの放置自転車を交換物資として届ける「銃を自転車へ」プロジェクトをはじめる。また社会の問題を考える出前授業をスタート、活動を継続・発展させるために学校や大学、企業、自治体などさまざまな主体を巻き込み、日本モザンビーク友好協会を立ちあげるにいたる。

<コーディネーションするときのポイントの整理：世古が質問、竹内が回答>

「NGO同士のネットワークに必要なのは？」

- ・ ビジョンの共有=「国際協力ができる人材育成」への共通のニーズ
- ・ 経験の共有=国際協力を学生が学ぶプログラムなど
- ・ 課題の共有=雇用できる環境づくり

「行政との協働に必要なのは？」

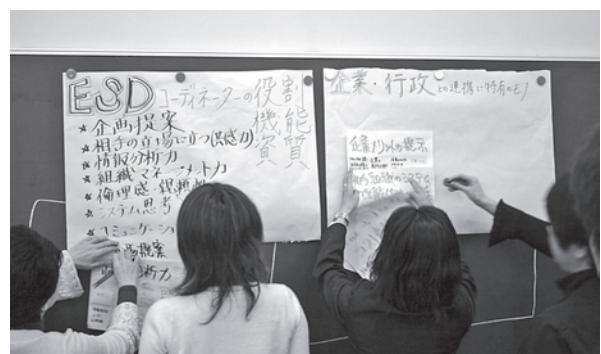
- ・ 行政立場・ルールを理解する
- ・ 行政批判から入らない
- ・ 国際、環境、男女共同参画など、多様なセクションをつなぐ

「企業との協働に必要なのは？」

- ・ ものづくりをとおして、マッチングをとおして（フェアトレード、ソーラークリッカーなど）

「国際レベルのネットワークに必要なのは？」

- ・ トップのネットワークを活用（外務省、大使など）
- ・ 姉妹都市の枠組みの活用



研究会の流れ	
10:00-10:30	オリエンテーション & 参加者自己紹介
10:30-11:00	ベースの共有「協働コーディネーターとは？」
11:00-11:30	えひめの事例におけるコーディネーターの役割
11:30-14:00	グループワーク：ESD コーディネーターの役割・機能・資質とは？
14:00-14:30	発表と全体ディスカッション
14:30-14:45	ふりかえり

● グループワーク「ESD コーディネーターの役割・機能・資質とは？」

①仲間を集めて組織づくり、②行政との連携、③NGO 同士の連携、④企業との連携、⑤国際ネットワーク、⑥学校・教育機関との連携、の 6 つのフェーズでグループづくりを行い、それぞれのレベルで、ESD コーディネーターが担うべき役割・機能を抽出、あわせて能力や資質も書きだしました。能力は、すべてのフェーズに必要なものと、そのフェーズ「ならでは」のものに分けました。(②は成立せず)

● グループワーク 成果

★共通の役割・機能・資質

企画提案力、事業構築能力、共感力、コミュニケーションスキル、情報分析力、組織マネジメント力、リスクマネジメント力、正義感・信念・問題意識・信頼性、システム思考、リーダーシップ、ニーズとシーズのマッチング（課題抽出力）、空間・時間・人間の調整力、事務能力、営業力、広報力、それぞれのステージでの政策提言能力

★ 「ならでは」の能力、よりすぐれた能力が求められるもの

① 組織づくり

ESD の包括的な知識を示せる能力

③ NGO 同士の連携

コーディネーターとしての一歩引き方と、実践者としての前への出方のバランス

（課題）中立性が重要だが、中間支援の役割だけではしんどい、中間支援を支える費用がない

④ 企業・行政との連携

win-win の関係づくり、プレゼンテーション力（実績を正しく伝える）、相手組織を理解したうえでの提案力、人脈・ネットワーク、コスト意識

⑤ 国際ネットワーク

国際的な流れや包括的な知識を示せる能力、リソース・国際協力の動きの把握、異文化理解

⑥ 学校・教育機関との連携

教育機関の文化やルール、専門性に関する知識、教育委員会との関係づくり（学校に入る前に教育委員会をとおらないと、個別対応になってしまう。避けてとおれない）、ESD の重要性・必要性を説明できる、教員とのカリキュラムの共同開発



● 今後へむけて

ESD コーディネーターは専門性の高い仕事。その専門性を明らかにし、職能化・社会化することをめざすためのプラットフォームが ESD-J の仕事ではないでしょうか。でてきた情報を整理して、ESD コーディネーターとはなにかを明確にし、その育成システムをつくり、育った人材をネットワーク化していくことが ESD-J の役割であると思っています。（世古）

（記録：村上千里）



ESD のこれからを創造する

■ パネルディスカッション「ESD のこれからを創造する」

- 【研究会 1】地域の ESD を促進するしくみ 森良
【研究会 2】都市と農村と ESD、食と農を切り口に 清水悟
【研究会 3】学校での ESD 実践、ESD 教材 浅川和也
【研究会 4】ESD コーディネーター養成講座 世古一穂
【研究会 5】みんなと地球と ESD 大島順子
〈進行〉 竹内よし子 (ESD-J 副代表理事)

各研究会からコーディネーターが 1 人ずつ壇上にあがり、各研究会の簡単な報告と、ESD をすすめていくうえでの今後の課題や ESD-J として今度どんなことを行うことが必要か？などについて発言しました。以下は今後の課題と ESD-J のすべきことについての部分のみ抜粋してご紹介します。（☞各研究会の結果は 20～29 ページを参照）

清水： 具体的な問題を知る、わかる、持続的に気にかける、愛することが必要。ESD-J は農業が弱いのではないかという声がでた。ESD-J のなかに農業の研究会をつくっていくことを検討したい。

森： 縁側の再生、近郊の農山村と交流し、活性化することは持続可能な社会づくりに重要。ESD 学校教育研究会をつくり、学校と地域をつなぐ研究をしたい。現場に行って学習することが重要。

世古： ESD コーディネーターは、ESD を推進していくカギ。コーディネーターが職能化するように、政策で社会の仕事になるように位置づける必要がある。

浅川： ストレスを抱える教員仲間とどうつながるか。できることからはじめたい。また教員研修のなかに持続可能な社会づくりをしっかり位置づけ、制度として組み込むように取り組んでいくことが必要。

大島： さまざまな領域でがんばっている人が持続可能な社会づくりにむけ、自分たちの活動を大事にしながらつながって世界に発信していくこと。ESD-J という NGO の横をつなぐ団体があることを発信していくことも重要。

フロアーから

- ESD は「国民全体の意識改革」がゴールだから、点でやるのではなく全国展開が必要。そのツールの一つとして学校教育がとても役に立つ。現場の校長が意識を変えないかぎり、現場は変わらない。そこで学習指導要領の総則に「持続可能な社会づくりをめざす」という文言が入ることが大事。実践がどういう意味があるかの意識をもって指導することが重要だから。
- 学校で ESD が行われることで、地域とつながり、家族とつながる。大学が果たす役割も重要だが、小

学校からのつながりができるないと、心が育たない。心を育てている小学校と高等教育の大学との連携が重要。

- 地域コーディネーターを ESD コーディネーターとおきかえて、ESD の理念コンセプトを理解してすすめていってもらいたい。
- プログラムやカリキュラムの開発は、現場で交流しあい、切磋琢磨しあいながらすすめたい。体験だけでなく、きちんとやったことをまとめて理論化して、他で使えるようにしていくことが重要。
- 文科省指定で研究しなさいといわれれば、すすめやすい。500 校指定にしてもらえばいい。最初は命令でもおもしろみを感じて次にすすめられればいい。
- 学習指導要領改訂で、マスコミの立場から持続可能な社会づくりという視点の不足が発信されないというのがおかしい。マスコミなども巻き込んでいくことが必要。



閉会のあいさつ：阿部治

でてきた課題をもとに、ESD-J として今後どう対応していくかを議論していきます。今回のミーティングで非常に急速に ESD の動きが広がってきてるのが実感できました。

2010 年には「生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）」が名古屋で開かれる予定です。生物多様性について関心が高まるということは、里山の保全、日本の農業の保全、日本の農のあり方を保存することにつながり、ESD にとっても大きなチャンスと思っています。ほかにも 2008 年の「G8 北海道洞爺湖サミット」、2009 年のドイツ「国連 ESD の 10 年中間年レビュー」など、持続可能な社会づくりにむけた世界的な動きをとらえ、ともに ESD 推進に活かしていきましょう。



同士たちに、出会えたこと。
ESDの現状が把握できた。エネル
ギーを感じて、受けとれたこと。
盛りだくさんで、吸収でき
ない面もありましたが……。

いろいろな人と
つながる仕掛けが
できている2日間
でした。

タイムスケジュールがき
つかったですね。もう少し
情報がほしかったです。

ESDは参画する
ことと、継続す
ることが大切。

一つひとつのセッション時
間が短いため、内容が詰め込
まれていて、あまり、突っ込
んだ内容に踏み込んだ発表が
なかったように思う。

全国からESD関連の
活動をしている団体の
集合する全国ミーティ
ングはすばらしい機会
だと思います。

企業へのアプロー
チも必要だと思いま
した。CSR教育の一
つとして重要です。

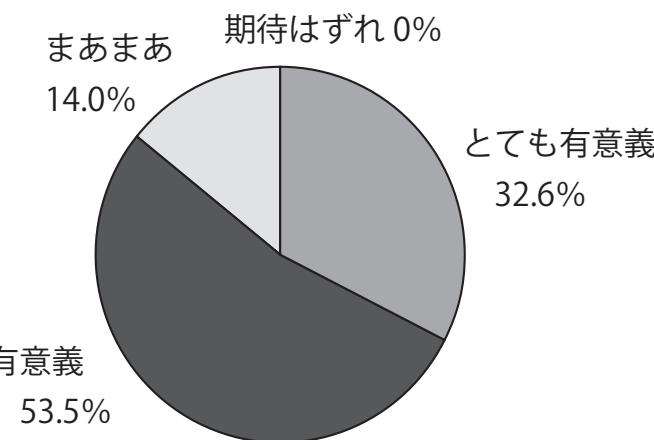
さまざまな立場に
ある方の意見を聞く
ことができよかったです。
とくに中部の方の勢いに元気をも
らいました。



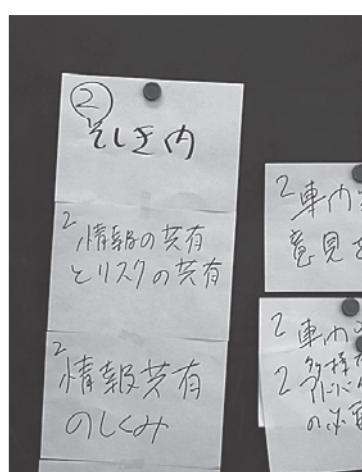
ESDの全国の取組みに
触れることができてよ
かった。自分の地域での
活動に活かすことができ
ると思う。

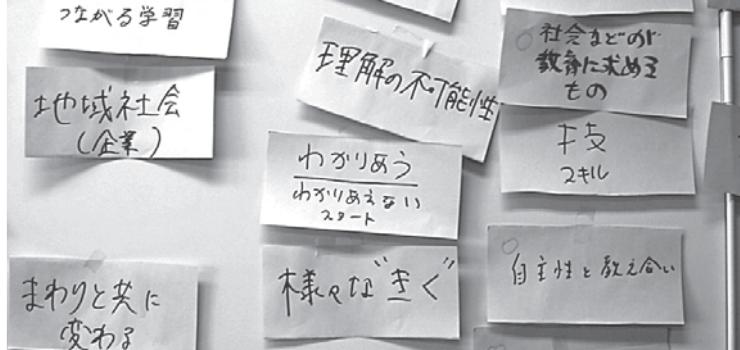
1年後には、
自分の実践事例
を発表したい。

Q. 今年の全国ミーティングはいかがでしたか？



参加者の声 ~アンケートより~





直接ESDにかかわっているわけではなくても、根底にあるものは同じだなあと感じられました。

これまで、同じ分野の他団体との交流が主だったのが、他分野の方と接点を持つことができた。

参加した方の多くは、情報共有や議論を深める場、また多様な方々との出会いの場として意義のあるミーティングと感じていただいだようです。しかし、もっとゆっくり議論できるような時間枠や組み立てが必要という声もたくさんいただきました。1.5日の枠をさらに広げるのか、発表件数を絞るのか。来年度はそれらの声を参考に、より充実した時間を提供していきたいと思います。

中部や関西などでの開催もありですね。いろんな地域でもESDにじかに触れられる全国ミーティングもいいな。



全国のさまざまな事例を知ることができた。



活動ジャンル、分野別のMLづくりなど専門的なことをしていくためのネットワークづくりを積極的に行ってほしい。

漁業組合、林業組合、生協、や企業(中小)なども全国大会や勉強会に巻き込んでいく必要があるのでは。

とにかく動きを広げてゆくことが最重要だと思います。マスコミを動かすことも大切ですね。

日本のESDの成長発展を見守っていきたい。自分も貢献して、支えていきたい。





会員発！私たちの ESD 実践

NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター

われわれの使命は " コミュニティ・エンパワーメント " です。活動の柱として、【①コミュニティ教育によるまちづくり、② ESD の地域・学校での展開、③平和と環境のためのアジア・ネットワーキング、④地域コーディネーターの育成に力を注ぐ】を掲げています。また、"ESD の発展の 5 つの幹 " として、【①人間らしい暮らし、生き方、②持続可能な地域づくり、③持続可能な地球、④ガバナンス（協治）の形成、⑤エンパワーメントの促進】を深めて広げていきます。

NPO 法人 開発教育協会

開発教育協会 (DEAR) のブースへようこそ！ DEAR は全国各地で持続可能な社会をつくるための教育活動「開発教育」をすすめる教育ネットワークです。世界の貧困・紛争・環境破壊・人権侵害などの問題と私たちの生活は深くつながっています。開発教育では、そのつながりを見直し、より公正で持続可能な社会をつくるためにできることを考えます。ブースでは ESD を実践するための教材や資料を豊富に揃えて販売しております。ぜひ、お立ち寄りください。

(社) 日本ネイチャーゲーム協会

ネイチャーゲームは 1979 年米国のナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏により発表された自然体験プログラムです。自然への気づきを目的とした活動で、体験をとおして感じることをベースにプログラムをすすめますので、知識や年齢に関係なく、身近な自然で誰もが楽しむことができます。(社) 日本ネイチャーゲーム協会では、公認ネイチャーゲームリーダー養成講座を定期的に開催しており、現在全国に 11000 人のリーダーが活動しています。

NPO 法人 国頭ツーリズム協会

沖縄本島北部に位置する国頭村は、日本国内でも生物の多様性が高く、世界的にも重要な地域として注目を浴びている亜熱帯照葉樹林やんばるの森を有する。その国頭村で持続可能な地域社会づくりをめざす国頭ツーリズム協会 (KUTA) の活動を紹介します。

- ・国頭村環境教育センター「やんばるの森」における「地域資源を利活用した環境学習」活動
- ・「やんばるの森を守り活かす連絡協議会」(CCY) の活動

日本ホリスティック教育協会

人や生き物、大地との〈つながり〉。頭、心、身体の〈つながり〉。教科の間の総合的な〈つながり〉。みえるものとみえないものとの〈つながり〉。「ホリスティック教育」は〈つながり〉を大切にし、気づき、広げ、深めていくことをめざします。よりホリスティックな教育・文化を創造していくために、実践者と研究者の連携を図り、ライブラリーを毎年発刊。『学校に森をつくろう！』『持続可能な教育社会をつくる』『ピースフルな子どもたち』など。

(財) 日本自然保護協会 (NACS-J)

日本の生物多様性の保全に、57 年取り組んでいる NGO。英語名の頭文字をとって、NACS-J (ナックス・ジェイ) という呼び名で知られています。個人・団体あわせて約 24,000 の会員に支えられ、「しらべる一調査・研究一」「まもる一環境管理・政策提言一」「ひろめる一環境教育・広報一」を柱に、なくなりそうな自然を守り、自然を守るしくみをつくり、守られた自然をもっとよくするための活動を展開。日本の自然の将来のために、ぜひあなたも会員になってください。

(社) 農山漁村文化協会

近代化は、あらゆる場面で生産効率を高め便利な生活をもたらしましたが、自然と人間の関係を敵対的なものに変えてしまいました。農文協は、農と食・健康・教育を軸心として「いのちの流れ」を呼びおこし、都市と農村の関係を変え、自然と人間の調和した社会を形成することをめざして、総合的活動を展開する文化団体です。

岡山ユネスコ協会・岡山市京山地区 ESD 推進協議会

岡山ユネスコ協会は、岡山市立京山公民館を拠点とした岡山市京山地区の ESD 活動に参画しています。京山地区は、学校教育を担う小・中・高・大学、社会教育を担う公民館、岡山ユネスコ協会などの NGO、さらに、町内会などの地域コミュニティや市民団体、企業がともに手を結び、岡山市京山地区 ESD 推進協議会を立ちあげ、京山地区 ESD フェスティバルを開催するなど、子どもから大人までが一体となって地域全体で ESD をすすめています。

岡山大学ユネスコチェア

岡山大学「持続可能な開発のための研究と教育」におけるユネスコチェアは、岡山の地域や海外の大学、国際機関と連携して、持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成にむけた取組みを行っています。地域レベルではとくに社会教育・生涯学習活動を通じた持続可能な社会づくりに取り組む岡山の公民館と協力しています。昨年10月にアジア太平洋地域のコミュニティ学習センターや公民館の担当者と議論した Kominkan Summitなどの岡山大学の取組みを紹介します。

岡山市（岡山 ESD 推進協議会）

岡山市では平成17年度に岡山 ESD 推進協議会を立ちあげ、岡山 ESD プロジェクトを開始しました。これは、環境教育や国際理解教育など ESD に関連した活動を行う学校や市民団体、事業者、社会教育施設などをゆるやかにつなぎ、情報交換や研修会の開催、市民への啓発活動などを行うことにより、持続可能な社会づくりを推進するものです。また、市域は国連大学のすすめる RCE (ESD に関する地域の拠点) にも認定され、世界の各地とも情報交換・交流しながら ESD をすすめています。

持続可能な開発のための教育の10年さいたま（ESD さいたま）

当団体は2003年に設立され、2004年にESD-Jの埼玉地域ESDミーティングを開催し、その後も活動を続け、2006年は県内各地で6回のESDミーティングなどと関東圏ESDブロックミーティング開催し、本年度は埼玉県の「NPOと市町村との協働アイデア提案会」でプランを提案し、埼玉県、県教育委員会、和光市、同市教育委員会とともに「協働と学びで拓く未来」を開催し、ESD学校教育研究会と授業デザイン研究会等を4回開催しました。

気仙沼市立鹿折小学校

鹿折小学校のESDの3つの柱は、①伝える内容としての環境教育と伝える手段としての英語活動が子どもたちの目標となる、環境教育とリンクした英語教育、②地域の環境を世界と比べることによって郷土のよさを再発見する国際環境教育、③海外や大学、NPO、地域の専門家と連携した、授業づくりや教員研修。これらを柱に、米国の小学校とTV会議を活用して交流したり、留学生などの外国人と交流し、グローバルな視野に立って、ESDをすすめています。

「平和のための埼玉の戦争展」実行委員会

「戦争の悲惨さを知り、平和の尊さを学ぶ」取組みとして1984年から毎夏、浦和駅前のデパートで開催。約1万人が参観します。戦争は最大の暴力で、それを支える軍事(戦争)システムは平時においても民主主義、人権、経済、環境などあらゆるものに大きな影響を与えています。「戦争を起こさない、起こさせない」ために、平和システムとそれを支える国連憲章や日本国憲法の精神を柱にして、「世界を変える人になろう」をテーマに取り組んでいます。

日本ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン（GCPEJ）

GCPEJは1999年のハーグアピールを機会にはじめられました。「平和の文化をきずく会」と連携し、国連「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」の推進にも取り組んでいます。コロンビア大学のベティリアドンさんによる『戦争をなくすための平和教育』(明石書店)と元ユネスコ平和の文化局長のアダムスさんの『きずきあう平和と非暴力の文化』(平和文化)を展示します。

(株)日本エコプランニングサービス

日本エコプランニングサービスは、旅行業を通じて、地域の持続可能な開発に貢献するための組織として、2001年に設立されました。具体的には国内外にて、現地で活躍するNGO・NPOの活動にボランティアとして参加するツアーの企画、募集、販売を行っています。
ただ訪れるだけのツアーではなく、最前線でのボランティアに従事していただくことで、参加者の意識の向上や諸団体への継続的な支援、そして訪問地の持続可能な開発に貢献しています。

日本放送協会（NHK）

NHKでは中高生以上むけのESD関連教育番組「地球データマップ」(20分×全20本)を放送し、学校現場などで活用されています。2008年度は日曜深夜24:15から教育テレビで再放送。関連書籍「NHK 地球データマップ 世界の "今"から "未来"を考える」(NHK出版)を出版したほか、ホームページ <http://www.nhk.or.jp/datamap> では活用例・授業案を紹介しています。



会員発！私たちの ESD 実践

(財) アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)

ヒューライツ大阪は、国際人権情報の交流拠点をめざし1994年7月に設立された大阪府認可の公益法人です。この間、「人権教育のための国連10年」の推進や国際人権教材奨励事業（AWARD2004～AWARD2006）を実施し、収集した国内外の人権教育資料の分析を通じて、開発・環境・人権をつなぐESD教材づくりをすすめてきています。今回は、国際人権を身近に感じるビデオ、イラスト冊子、単行本、写真集を展示しています。

(財) ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

ACCUは、アジア太平洋地域のコミュニティレベルでの、とくに社会経済的に恵まれない人たちを重点とする活動を支援しつつ、そこに育ち根づいているさまざまな知恵や実践と、国際社会において持続可能な未来についての議論をつなぐ役割を果たすことを通じて、ESD推進に貢献しています。展示では、各国パートナー機関との関連事業の概要や、それらを通じて制作されたESD教材、またアジア太平洋におけるESD事例集をご紹介します。

岩手大学 ESD 推進委員会

岩手大学は、文部科学省現代GP採択事業として「持続可能な社会のための教養教育の再構築『学びの銀河』プロジェクト」を、2006年度より実施しています。学部・学年をこえて、ESDに関連する教育プログラムを展開することが特徴です。これまで、ESD科目的設置・開発や、ESD銀河セミナー・国際シンポジウム・HESDフォーラムなどを開催してきました。これらの取組みのなかで明らかになってきた課題と、今後の展望について報告します。

愛媛大学瀬戸内環境ESD

瀬戸内の山～里～海～人をフィールドに、持続可能な社会づくりを担う人材育成を行なっています。全学部の1～2年生と社会人聴講生を対象とした「環境ESD基礎」「環境ESD指導者養成講座」では、環境教育の理論や地域からグローバルな課題を学ぶ座学と、フィールド調査や公開講座を実施します。その修了生対象に「指導者演習」としてNPOや社会教育施設でのインターンシップを行い、大学と地域が相互に学びあうESDを実践しています。

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会は、1994年の発足以来、熱帯雨林の現状と課題や森を守る人びとをテーマとした現地調査を毎年行い、現地からゲストを招いて国内での熱帯雨林保護の活動を行っています。商業伐採などによる深刻な破壊がすすむなか、私たちは原生林を守りながら「持続可能な発展」を模索する村人を支援しつづけています。現地へのエコツアーやフェアトレードもはじめました。

『地球市民こどもアカデミア』 + (有) グレイスアカデミー ESD 事業部

2007年に立ちあげ実践した『地球市民こどもアカデミア』の活動を紹介します。子どもも大人も一緒に、海や山に行ったり、ピザを焼いたり……、そのなかで、お互いの気持ち、つながり、五感で感じることを大切にし、みんなで成長しました。この活動をベースに、「参画型ESDプログラムのシステム・マネジメント開発—地球市民こどもアカデミアを事例として—」というタイトルで特定課題研究に取組みました。

環境・国際研究会、日中環境教育協力会

- (1) 日中協力により中国全土で市民の水環境モニタリングをESDとして実施しています。
- (2) 日本、韓国、中国、ロシアで「漂流・漂着ゴミ」が大きな問題になっていますが、中国の海洋ゴミ問題に取り組むNGOのネットワーク化と海洋ゴミ問題の取組みへの支援をしています。

